

健保採用方剤

# 証と方剤学体系

— 初歩から応用まで —

玉城博任 著

燎 原

## 序

漢方医学界が、他の医学界に比して、学問として劣る最大の点は、医学用語の統一がなされておらず、定義の曖昧さと難解さにある。巷の漢方医書に満足し得ないのも、こうした背景があるからには、致し方のないことであろう。

理論が高度になれば、あるいは難解になればなるほど、簡にして要を得ることが困難となる、がそれゆえに、ますます正鵠を得た要約が渴望される。私はすべての証について、理解しやすい簡潔な要略を作成することから始めた。さらに、よりレベルの高い理論を採択することに専念した。

漢方医学と西洋医学とは、異質の医学体系である。いま、西洋医学者が、「異質の漢方医学体系を、早く全て理解したい。」と言った場合、とても一朝一夕にはいかないであろう。

しかし、本書を読まれる方は、漢方の初歩から最高レベルまで、最少時間で一気に、かけ登ることができるものと、ひそかに自負するものである。

初心者の方が、本書を読まれる場合は、方剤の八綱、六淫、四傷と現代病名の適応症をながめるだけで充分であり、次の段階で、六経、三焦、四要を採用すればよい。以上が終了したら、次に臓象と経絡を理解していただくことになるが、西洋医学的思考に慣れているために却って混同しそうな方は、参考程度にとどめておかれてもよいと思う。

本書を一読すれば、少なくとも漢方医学体系の全容をつかんでいただけるものと確信する。

甲子年甲戌月（1984年10月）

玉 城 博 任

## 目 次

第1章 証の解説 .....	1
1. 病位理論 .....	4
(1) 表裏 .....	4
(2) 六経 .....	5
(3) 三焦 .....	8
(4) 四要 .....	9
(5) 経絡 .....	12
2. 病性理論 .....	19
熱証・寒証	
3. 病勢理論 .....	22
実証・虚証	
八綱弁証 .....	23
4. 病因理論 .....	25
(1) 六淫 .....	25

(2) 四傷 .....	27
5. 病質理論 .....	29
肝木 心火 脾土 肺金 腎水	
第2章 証と薬物 .....	41
六淫四傷と薬物 .....	44
薬向から出た分類 .....	51
薬物分類表 .....	54
薬物の配合法則 .....	86
第3章 証と方剤 .....	97
方剤分類表 .....	100
漢方医学史年表 .....	154

## 第 1 章

# 証 の 解 説

証とは、漢方医学的にとらえた症候、あるいは体質の個体差の表現である。

漢方医学で用いられている証は、以下の分類で、そのすべてが列挙されている。古方派、後世派、あるいは折中派であれ、中医学派であれ、以下の分類のワクを越えていない。

## 漢方医学で用いられている証の分類

### 1. 病位

- 1) 表裏—表証・裏証
- 2) 六経—太陽・少陽・陽明・太陰・少陰・厥陰
- 3) 三焦—上焦・中焦・下焦
- 4) 四要—衛分・氣分・營分・血分
- 5) 經絡—肺經・膀胱經  
心經・心包經・胆經・胃經・小腸經・三焦經・  
大腸經・脾經・腎經・肝經

### 2. 病性——熱証・寒証

### 3. 病勢——実証・虚証

### 4. 病因

- 1) 六淫—風邪・寒邪・暑邪・火邪・燥邪・湿邪
- 2) 四傷—氣傷・血傷・痰傷・鬱傷

### 5. 病質——肝木・心火・脾土・肺金・腎水

## 1. 病位理論

病気が人体のどの部位にあるか、あるいはその病気が浅いか深いか即ちどのような病的段階の位置にあるか、によって病候を分類することを病位的分類という。

### (1) 表裏

病位的分類法の中では、最も簡単な分類法である。表の部位というのは、ヒトが四つんばいになって日の当たるところであり、日の当たらない陰が裏の部位である。

頭痛、項部痛、肩こり、腰痛等の比較的新鮮なものは表証であり、感冒、急性鼻炎、急性気管支炎、急性の皮膚症状、突発性浮腫などが表証の病である。

表証の病が長びけば裏証の治療に切りかえる。例えば、腰痛症は苦痛部位は表位にあるが、慢性になれば裏証向きの方剤を出す。またその逆もある。久病の気管支喘息を持っている病人は、普段は裏証方剤を服用していても、いったん発作が起これば、表証用の方剤でまず発作を押さえ、静まれば、もとの、あるいは加減した裏証方剤に戻すといった具合である。次の表によって表裏がもとめられる。

	表	裏
苦痛部位	頭部、鼻部 項部、肩背部 腰部 (四肢)	咽喉部(半表半裏) 口、胸部 腹部、肛門 (四肢)
熱型	稽留熱	弛張熱、間歇熱 寒熱往来(半表半裏)
舌苔	薄い	厚いことが多い
脈	浮	沈
時間的経過	急性 (発病して二週間経過したかどうかを大体の目安として まだ二週間経っていないなら表、それ以上経過していたら裏とする) 慢性	

### (2) 六経

病病が現わす証候を六つの段階に概括した病期分類法である。六経理論でいう「陽証」「陰証」は空間的なとらえかたであり、「三陽」「三陰」は、時間的なとらえかたをしている。「陽証」とは、病候が亢奮的、炎症的、充血的、即ち陽的。「陰証」とは、病候が衰退的、アトニー的、貧血的、即ち陰的になっている状態である。

「三陽」の症状の全体像は陽証であり

太陽病、少陽病、陽明病 に病期をわけると。

「三陰」の症状の全体像は陰証であり

太陰病、少陰病、厥陰病 に病期をわけている。

傷寒論に書かれている定義と、その後にあげられている方剤を  
考え合わせ、八綱弁証すれば、

太陽病—表寒証、表熱証で病位は最も浅い。

少陽病—裏熱証。

陽明病—裏熱証で少陽病より病位は深い。

太陰病—裏寒証。

少陰病—裏寒証、裏熱証で病位は陽明病、太陰病より深い。

厥陰病—裏寒虚証、裏熱虚証で病位は最も深い。

ということになる。傷寒論の原文と適応方剤をあげる。

六 太陽病—脈浮頭項強痛而惡寒。  
桂枝湯 葛根湯 麻黄湯 小青竜湯  
少陽病—口苦、咽乾、目眩也。  
瀉心湯類 小柴胡湯 柴胡桂枝湯 黄連湯  
陽明病—胃家實是也。  
承氣湯類 麻子仁丸 茵陳蒿湯 白虎湯  
太陰病—腹滿而吐、食不下、自利益甚、時腹自痛。  
桂枝加芍藥湯 小建中湯 苓桂朮甘湯 人參湯  
少陰病—脈微細、但欲寐也。  
麻黄附子細辛湯 真武湯 四逆湯 附子湯  
厥陰病—消渴、氣上撞心、心中疼熱、飢而不欲食、食則吐衄、  
下之、利不止。  
当歸四逆加吳茱萸生姜湯

(傷寒論、張仲景、西暦 200 年頃)

合病—六つの病期のうち、一つだけでなく二つか三つの病期が  
同時におこる場合、これを合病といっている。

太陽病と少陽病の合病

太陽病と陽明病の合病

少陽病と陽明病の合病

三陽(太陽、少陽、陽明)の合病  
の四つのタイプがある。

併病—ある一つの病期が解消しないうちに他の病期の病状が相  
ついでおこる場合、これを併病といっている。

太陽病と少陽病の併病

太陽病と陽明病の併病

の二つのタイプがある。

(合病であれ、併病にしる、実際上は、上記以外の別のタイプ  
もありうることである。)

病期の進む順序が六經の順に行く場合、これを「循經伝」とい  
い、六經の順をふまずに一期又は二期とばして進む場合、これを  
「越經伝」といい、三陽病の経過なくして、いきなり太陰病や少  
陰病から病がはじまる場合、これを「直中」といっている。

### (3) 三焦

病位的分類のひとつであり、裏証を上下に再分類したものである。広義には表証も上焦に含んでいる。上焦、中焦、下焦へといくにしたがって病は人体の下部にうつり、より重要臓腑が犯され、病は重くなると古人は考えたのであろう。肝は脾より解剖学的には上にありながら、脾の中焦に比して肝は下焦に配されているところをみれば、古人の考えがうかがわれる。(病位的分類の三焦と、臓腑の三焦腑、経絡の三焦経と混同してはならない。)

三焦	上焦——胸膈以上の部分 (胸部) 心、肺 (呼吸器症状)
	中焦——胸膈以下、臍以上の部分 (上腹部) 脾、胃 (消化器症状)
	下焦——臍以下の部分と陰部 (下腹部) 肝、腎 (内分泌、泌尿生殖器症状、上焦中焦以外の全身症状)

### (4) 四要

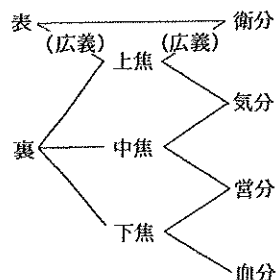
四要とは、病位的分類を内外的に再分類したもので病状の深淺をあらわす。温病理論における病期分類法であり、明末清初、傷寒理論を修正するものとして登場した。

四要	衛分——	防衛をつかさどる (表邪に対する防衛・発熱・悪寒・咳嗽・口渴等)
	氣分——	防衛が打ちやぶられ既に病人の元気を損ねている段階 (気分のイライラ、腹痛、便通や尿状の変化その他裏証で営分、血分に該当しない一切の症状)
	営分——	栄養状態にまで病邪が入り込んだ段階 (異常瘰癧、異常肥満、腹水貯留等一見して異常とわかる症状)
	血分——	血液が破壊されたり、悪液質になったりする末期段階 (吐血・咯血・下血・瘰癧・精神錯乱・起坐不能等)

葉天子は「外感温熱篇」において、衛氣營血を主にして病期分類をし、呉鞠通は「温病條辨」において、三焦を主にして病期分類をおこなっている。両者ともに、衛氣營血と三焦を導入して弁証している。衛氣營血弁証と三焦弁証は、温病理論における病期分類法として、傷寒論六經弁証にとってかわってしまったのである。



る。なぜなら、衛氣營血も三焦も、病位の概念は正と再分類のためにつくられながら、病期をも表現できる利点を有しているためである。表裏と三焦と衛氣營血の関係を図で示すと以下のようになる。



日常診療において、衛氣營血のとり方は、まず、衛分であるかどうかをみる。なければ氣分か營分か血分かであるが、この3つの中でいちばんわかりやすいのは、血分の特徴であるから、血分に入っているかどうかをみる。血分でなければ氣分か營分かということになる。ここで氣分と營分のおさえ方をしっかりしていればよい。營分の特徴というのは、誰がみても一見して病人とわかるまでに、病気が進んだ段階ととらえればよい。具体的に言うと、

- 1) 病色 (黄疸色、貧血色、充血色)
- 2) 浮腫 (顔、四肢の異常なむくみ、腹水)
- 3) 肥満と瘠瘦 (異常な太りすぎとやせすぎ)
- 4) 憔悴 (ひどくやつれている)
- 5) 異常姿体 (腰や膝が相当変形し、その動作に異常が感じられる)

以上のうちひとつでもあれば營分ととり、該当なければ、すべて氣分とすればよい。

尚、ここでひとつ注意しなければならないことは、血分のとり方である。女性の生理不順、無月経、不妊症、男女問わず長期の出血性疾患などは、血液破壊や悪液質に至らなくても血分用の方剤を用いる。というのは、全身状態が比較的軽症であっても、そう云った疾患には、血分用の方剤の方が効果が大きいからである。

追言すれば、

氣分の病気には、氣分の方剤が最もよく効く。仮りに營分用、血分用の方剤を与えたとしても、効果が出る迄時間がかかるだけで効かないことはない。

營分の病気には、營分の方剤が最もよく効く。仮りに血分用の方剤を与えたとしても、効果が出る迄時間がかかるだけで効かないことはない。しかし、氣分用の方剤を与えた場合、ひじょうに効果が悪く、全く効かないことがおこる。

血分の病気には、血分の方剤が最もよく効く。しかし、氣分用、營分用の方剤を与えた場合、ひじょうに効果が悪く、全く効かないことがおこる。特に氣分用方剤の方が効かないことになる。血分から遠く離れているからである。衛分は、もちろん衛分の方剤がよく効く。仮りに氣分用の方剤を与えたとなると、急性症状が逆に入り込んでこじらすことになる。こじれた後に、時間を経過して治るか、あるいは、さらに悪化するかである。したがって、病的段階にいちばん合った方剤を投与することが肝要である。

## (5) 経絡

病位を最も詳細に分類したのが経絡であり、病のposition又はstageによって、十二の段階に分類している。ある薬物がある経絡症状に有効であるとき、その薬物はその経絡に属するという。(薬物帰経という。)

### 「膀胱経」

病邪が個体をおそう最初の防衛反応であり、発熱、悪寒、頭痛、項背腰痛、鼻水などの感冒症状の他、突発性浮腫や感冒性下痢、急性の皮膚症状も該当する。

旁光とは、行き交うたいまつ<sup>たいまつ</sup>の火であって、侵入してくる病邪を、この光で見つけて、追い払う防衛作用とみており、人体の一番外側を走る経絡がこれに当たる。

### 「肺経」

上記と同じく病邪の体内侵入に対する防衛と排出であり、咳嗽、気の上逆、煩躁、胸満などの呼吸器症状と皮膚症状が主である。市は、物々交換の囲みであり、体の内と外との交換、即ち呼吸を、皮膚の囲みの中で潤滑に行わせしめる経絡ということである。頭痛、発熱、呼吸器症状、皮膚症状の4つの症状でおさまれば、肺経ととり、これ以外の表証の症状があれば、膀胱経ととればよい。

### 「心経」

膀胱経と肺経は「表証」であり、また「衛分」であるが、心経は「裏証」及び「気分」の最初の段階であり、軽い不眠、イライラ、ほてり、のぼせなどの情緒的な症状が主で、肉体的症状はあまりみられない段階である。単なる心の作用でおきる動悸は、

心経ととればよい。

心は心臓の象形文字であり、循環作用というよりも、情緒の作用ととらえていた。

### 「心包経」

心包とは心下にある袋、即ち、胃のことであり、これは「心」に作用される「包」である。したがって心包経の症状というのは、ストレスが亢じて、軽い胃症状がおこる段階である。嘔気、悪心、食欲不振などの症状をともなう。ストレスだけなら心経であるが、そこからさらに神経性胃炎となれば、心包経ということである。つまり、心窩部症状である。心経と心包経の違いを、このように理解すればよいが、心包経は通常心経に含めてしまうことが多い。

### 「胆経」

胆は膽の俗字であり、詹は、物に臆しない勇気とか度胸、大言という意味があり、精神的に頑張って、士気を高めて抵抗するさまを言う。即ち、ストレスが胃だけでなく、五官や全身に影響するようになってくると、これに対して、さらに意識を強化し、衝撃を緩和しようとする段階で、胃症状以外の症状、例えば、緊張による便秘や下痢、神経性頻尿、口苦、胸脇苦満、緊張性頭痛、片頭痛、眼精疲労、耳鳴り、皮膚掻痒症、腋下痛などをともなうようになる。つまり、心窩部上部側方症状が加わってくる。胆力をふりしぼって克服できるかどうかというところである。

心経、心包経、胆経の症状は、精神面の障害を取り除けば、すぐに改善する軽症の段階である。

### 「胃経」

胃とは現代の腸のことであり、消化機能が全般に犯される段階で、意識や胆力では治せない胃腹痛、嘔吐、便秘、下痢などの

心窩部下部症状があらわれる。食あたりや細菌による急性胃炎、大腸炎などは、いきなりこの胃経から侵入するわけである。つまり精神的影響が及ぼす一過性の障害は胆経までで、胃経から肉体的障害が主となる。(ストレスが持続して潰瘍悪化、吐血といった場合は、もちろん胃経以上に病位は進んでいると、とらなければならない。)

胃経の走行と関連する足背部痛、膝関節痛、顔面痛(いずれも軽度で発作的な痛み)なども、この病的段階における経証としてとらえられる。

#### 「小腸経」

小腸は人体の中でかなり内側にあり、病邪が人体の深部に入りこもうとすれば、この小腸を通らなくてはならないと考えた。小は雨だれであり液体を意味し、易は機能のことであり、液体の機能、即ち、血液、淋巴液の機能による生体防御の段階であり、現代で云う循環機能のことであり、解剖学的見地の小腸とは、かなりかけ離れたものである。軽い血液症状、これに起因する肘、肩、肩甲部、後頸部などの心窩部後部症状、頰の症状、目の充血、多涙、中耳炎、および軽い尿症状(残尿感、排尿痛、尿道の異常感覚)などがあらわれる段階である。

#### 「三焦経」

焦とは、こげる、あぶるということで、炎症、化膿が主症状になっている段階である。三焦については、既に説明しているが、古人は、どの臓器をみて三焦と名付けたのかを考えてみると、胸腺、脾臓、腎臓をあわせて三焦と称し、順に上焦、中焦、下焦と云い、それぞれともに消炎機能を有していると、とらえたものと思われる。

三焦経の症状は、皮膚炎、癰、目やに、耳だれ、蓄膿、喉頭気管支炎、濁尿、肘、肩、頸部の痛みなどがあげられる。

三焦経は、上焦を胆経、中焦を小腸経大腸経、下焦を腎経に含めて整理することが、通常多いようである。

#### 「大腸経」

大は全身で、易は機能のことであるから全身機能のバランスが乱される段階である。頭部と軀幹、軀幹と四肢の間の機能に異常が生じ、排泄症状、顔面口腔症状があらわれる。「気分」の中では最も深い病位となる。

症状としては、立ちくらみ、倦怠感、こわばり、羞明、嗅覚異常、難聴、軽い出血(鼻、歯肉、痔、等)、反復する皮膚症状、嚥下障害、便秘と下痢の交互、脱肛、排尿異常、多汗、三叉神経痛、前腕上腕の痛みなどがあげられる。

#### 「脾経」

卑とは、大事なものをしまっておく器、即ち、栄養源になるお酒をしまっておく酒器であり、解剖学上の脾臓の形が、とっくりのような形をしており、卑に似ているので、古代人は、脾臓を見て脾と名づけ、これに栄養という機能を代表させた。「営分」であり、異常肥満とか異常瘠瘦のように、一見して、栄養障害がわかる程の段階まで病位が進んだ状態である。脾経に入る薬物は、全身栄養の調和、胃腸や脾臓機能即ち、消化吸收機能の調整などの効果を与えることができる。

症状で云えば、意識弛緩、嗜眠、ひきつけ、異常な肥瘦、憔悴、常時倦怠感、顕在する糖尿病、ひどい浮腫または寝汗あるいは帯下、遺尿、黒便、呼吸促迫などが該当する。脾経と次の腎経は常習性疾患である。

### 「腎経」

臣は奴隷で、又は手、即ち奴隷の手であり、主人の身近にいつもいて常に守り役に徹する人、近衛部隊が必要なぐらいに、生命力とりわけ精力が著しく低下している段階である。解剖学上の腎臓ではなくて、副腎の機能障害ととらえる方がよい。

内外分泌の調和、心臓や腎機能の調整、泌尿生殖作用の調整、男女生殖器の正常化、血圧安定作用などの効果を腎経の薬物は有する。

症状で云えば、意識朦朧、痙攣、振戦、喘息、心臓痛、悪性高血圧、相当な低血圧または貧血、はなはだしい浮腫、脱汗、尿失禁、血尿、水様便などが該当する。

### 「肝経」

干は敵から身を守る盾であり、国王みずからひとり盾を持って戦う最後の病邪との戦いであり、死と隣りあわせの症状である。

「血分」であり、構造的疾患で末期段階の血液症状、悪疫質、長期起床不能などの症状を有する。薬物婦経が肝経のものは、内外分泌の調和、心臓や肝機能の調整、造血機能生殖機能の調整、男女生殖器の正常化、止血作用、解毒作用、自己免疫機能の正常化などの効果を与えることができる。

症状で云えば、起床不能、意識不明、発狂、てんかん、運動不調、筋萎縮症、無月経、崩血(漏)、常時出血(吐血、血便、血尿)、両便失禁、尿崩、便秘、絶症の皮膚疾患(膠原病、ベーチェット病、等)などが該当する。しかし、医学常識から云って、このような重症者は、たとえ方剤と証があつたとしても、簡単に治せるものではない。(張明澄講義録参考)

経絡の名称は次のようになっている。

### 陽経

#### 足陽経

太陽膀胱経

少陽胆経

陽明胃経

#### 手陽経

太陽小腸経

少陽三焦経

陽明大腸経

### 陰経

#### 足陰経

太陰脾経

少陰腎経

厥陰肝経

#### 手陰経

太陰肺経

少陰心経

厥陰心包経

傷寒論六経の名称と十二経絡のあたにくる名称とは、足の経絡六本に関しては、一致している。(病位対照表を参照)

以上、述べてきた病位理論、表裏、六經、三焦、衛氣營血、經絡をひとつの表にまとめた。

病 位 対 照 表

表裏 三焦 四要	←表→		←裏→									
	←上焦→				←中焦→				←下焦→			
經絡	←衛分→		←氣分→						←營分→		←血分→	
	膀胱經	肺經	心經	心包經	胆經	胃經	小腸經	三焦經	大腸經	脾經	腎經	肝經
六經	熱証	太陽病	少陽病			陽明病				少陰病		厥陰病
	寒証		太陰病									

病気で、ある經絡症状が出現した場合、その症状が主に外部の筋皮の症状なら經証、その症状が主に内部の臟腑の症状なら腑証、とわけた場合、本書で云っている經絡症状は腑証にあたるものである。しかし、この分類は針灸治療における經絡選出の際に、そのままあてはまるものであり、一經選出が決まったのち、主穴選出の際に、經証があれば、それを考慮に入れて主穴をとり、そして次に、從穴配穴をおこなえばよい。

## 2 病性理論

病気の性質に対して、「熱証」と「寒証」にわけている。疾病にかかった時だけではなく、日頃の体質の傾向をも表現している。

一言で云えば

「熱証」とは、熱量の過剰であり、興奮的、機能亢進的、炎症的、充血的であり、

「寒証」とは、熱量の不足であり、弛緩的、機能低下的、アトニー的、貧血的である。

熱証には、寒薬、涼薬を用い、熱的症状を解消させる。

寒証には、熱薬、温薬を用い、寒的症状を解消させる。

熱寒療法こそ、西洋医学にない漢方独特の治療手段であり、今日の西洋医学に対抗しうるものが漢方にあるとするならば、これに他ならない。この熱寒療法が真に確立されたのは、温病理論が完成された清以降であり、この時代の漢方が空白になっている日本漢方は、重要な医学体系の一つを知らずして今日に至った。

	熱 証	寒 証
望	顔色、赤 舌、黄苔 舌の色沢は紅色が多い 乾燥していることが多い	顔色、白 舌、白苔が多い 舌の色沢は淡白色が多い 紫色、黒色のこともある 湿潤していることが多い
聞		
問	冷気を好み、暖気を嫌う (冷房、薄着を好む) 顔、四肢のほてり、煩熱がある 発熱時は熱感が悪寒より強い 冷たいものを飲みたがる 帯下、濃くて少量 月経は早いめにきて量が多い 生理の色、鮮紅色 尿は遠くて量が少ない 尿色は濃い黄色になりやすい 便秘しやすい 嘔吐は食後すぐ(2時間以内) 眼脂や濃い喀痰、鼻が出る	暖気を好み、冷気を嫌う (暖房、厚着を好む) 四肢が冷える 発熱時は悪寒が熱感より強い 温かいものを飲みたがる 帯下、うすくて大量 月経は遅れがちで量が少ない 生理の色、暗黒色 尿は近くて量が多い 尿色は無色透明になりやすい 下痢しやすい 嘔吐は食後時間がたってから(2時間以上) うすい水っぽい痰や鼻水が出る
切	脈・数	脈・遅

cf. 尿は近いが量が少ない場合は寒湿が多い

四診の順に熱証か寒証が考察していく。望診では一見してわかる病色があれば、その時点で決まるが、大抵は次の診断にうつる。聞診では、即ち患者のしゃべる口調や声量又は嗅いで、熱寒を決めるのは、やや難があるので本表は空欄にしている。問診にうつる。問診の各項目は、上の方が下の項目より優先するようにならべている。優先順序の原則は、

- 1) 体そのものから得られた情報は、排泄物、分泌物から得られた情報よりも優先する。
- 2) 体全体から得られた情報は、体の局部からの情報よりも優先する。
- 3) 上部は下部よりも優先する。

問診で決まらなければ、切診で判断する。切診には、脈診と触診がある。触診で熱寒を決めるのも難があるので、書き入っていない。

「切診は四診の末なり」といわれるように、切診は診断のなかで、最後に用いるべきものである。日本では腹診を、中国では脈診を過大評価する傾向がある。主観的な腹診や脈診よりも、客観的な、望診、聞診、問診を重視すべきである。腹診だけで柴胡剤を出したり、脈診だけで少陰病と診断するのは、本末転倒であろう。

### 3 病勢理論

病邪と体力との均衡状態をみており、定義は、次表の最下段に示しているが、要するに

「実証」とは病邪が強いことであり、

「虚証」とは体力が弱いことである。

換言すれば

「実証」は、出ない悩みを持つ体力充実型

「虚証」は、出すぎる悩みを持つ体力衰弱型といえる。

実証には、泻薬（泻性薬）を用い、病邪を除去する。

虚証には、補薬（補性薬）を用い、体力を強める。

次表により、望、聞、問、切の順に実証か虚証かをさぐっていきばよい。優先順序は、熱寒を求めたときと同様である。

	実 証	虚 証
望	筋骨たくましい 目に力がある 動作が活発 舌：舌苔が厚く舌にしっかりと付着している（有根）	筋骨薄弱 目に力がない 動作がにぶい 舌：黒苔 舌質はうすくやせていたり、苔の一部が剥離したりする。
聞	声に力がある 話し口調に元気がある	声に力がない（小声でカスレやすい） 話し口調に元気がない
問	同年代の人に比較して体力がある、あまり疲れない 寝覚めは良い方 太食できる 自汗はない 生理痛は来る前に痛む 生理の出血量少ない 便秘しやすい	同年代の人に比較して体力がない、ひどく疲れる 朝の寝起きが悪い 小食で、食後眠くなる 自汗がある 生理痛は来てから痛む 生理の出血量多い 下痢しやすい
切	脈：実脈（強脈） 腹に力がある 拒按	脈：虚脈（弱脈） 腹に力がない （臍下不仁、小腹不仁） 喜按
（定義）	正気（強）＝ 邪気（強） 正気（弱）＜ 邪気（強）	正気（弱）＝ 邪気（弱） （正気強く邪気弱ければ病なし）

### 八綱弁証

八綱とは、表・裏・寒・熱・虚・実・陰・陽のことであり、症

候によって病位、病性、病勢に分類し、病状の全体としての傾向を認識するものである。陰陽は八綱の総綱であり、表裏、寒熱、虚実を概括する。即ち、表、熱、実が陽であり、裏、寒、虚が陰である。

弁証のしかたは、まず病位的に「表証」か「裏証」かに分ける。表裏が決まったら、次に病性について、「熱証」か「寒証」かに分ける。熱寒が決まれば、次に病勢について、「実証」か「虚証」かに分けるのである。つまり、表裏、熱寒、実虚に対する択一的選択がおわれれば、病状は八つのタイプの中のいずれかひとつに属する。即ち、

表熱実証	表熱虚証
表寒実証	表寒虚証
裏熱実証	裏熱虚証
裏寒実証	裏寒虚証

である。しかし、臨床上容易に分割しがたい場合もある。八綱のうちの二綱以上の症候が同時にみられることがあり、これを「相兼」といっている。(表裏相兼) 八綱のうち一綱が、もう一つの対立する綱の症候に変化することがありこれを「転化」といっている。また、「寒熱挾雑」、「虚実挾雑」といって、性質の相反する二つの症候が同時にあらわれることをいうことがある。また、「真熱仮寒」「真寒仮熱」「真実仮虚」「真虚仮実」といって、見かけ上の症候が、疾病本来の症候とは逆の仮象を呈することをいうこともある。いずれの場合も、弁証の過程において、優先順序を重んじ、臨床症状を分析して本質をとらえることによって、誤診を避けることができる。

## 4 病因理論

漢方医学における病因論が完成されたのは、金元時代である。科学による病因解明の手段を持っていなかった当時、考え出された病因概念が六淫と四傷である。

### (1) 六淫

熱証、寒証をひきおこすに至った病因を六つに分類したものである。金元四大家のひとり劉完素が、六淫という病因概念を、病性のなかに導入した。

六淫	風邪	神経が犯された場合、アレルギーの発生、又は再発
	寒邪	低温度の侵襲をうけた場合
	暑邪	体温が発散できなかった場合
	火邪	何らかの刺激をうけて興奮状態になった場合、炎症
	燥邪	体内における水分不足
	湿邪	体内の水分排泄異常(水分貯留)

寒邪は、「寒証」の原因になる。

暑邪、火邪は、「熱証」の原因になる。



風邪、燥邪、湿邪は、「寒証」「熱証」どちらの原因にもなる。

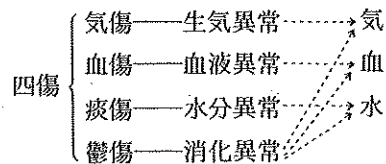
臨床上、燥邪と湿邪はより重要である。燥邪が固定してしまった場合あるいは燥的体質の人を燥証と云い、湿邪が固定してしまった場合あるいは湿的体質の人を湿証と云っている。燥証と湿証は、同時に存在することが少なくない。例えば、腹水を貯めている肝硬変の者が、痰がねばっこくて咯出できない、そして皮膚はカサカサに乾燥している、と云った場合である。このような時、湿証は燥証に優先して治療する。(実際上は、腹水をとる燥薬と、痰や皮膚をうるおす潤薬が組み入れられ、方剤全体としては、利尿作用を主とした湿証向きにつくる。)

燥証と湿証を、望、聞、問、切の順に以下の表にした。

	燥 証	湿 証
望	一見して乾燥 舌は乾燥し、亀裂や溝が走る	一見して浮腫 舌は湿っぽく、腫れぎみで粘稠
聞	空咳 聴診にて乾性ラ音	湿っぽい咳、呼吸音 聴診にて湿性ラ音
問	口渇とか咽がよくかわく 多汗 濃い鼻汁 咯出困難なねばっこい痰 帯下少ない 多尿 便はかたい	唾液がよくたまる 振水音あり、嘔気嘔吐多い くしゃみ鼻水が多い うすい水っぽい痰 帯下多い 尿量少ない 軟便
切	皮膚がカサカサしている	皮膚は湿潤、押せばむくみ のため指圧痕が残る 腹水、関節内水腫

## (2) 四傷

実証、虚証をひきおこすに至った病因を四つに分類したものである。金元四大家のひとり朱丹溪が、四傷という病因概念を、病勢のなかに導入した。



「気傷」とは、生体の機能亢進および低下により、生氣に異常がみられるものをいう。

「血傷」とは、血液と血管に障害があるもの、例えば、不正出血、瘀血、貧血、紫斑、血管腫、血管炎、静脈瘤などがみられるものをいう。

「痰傷」とは、消化器と呼吸器の水分異常であり、胃内停水、水様性下痢、唾液の異常、喀痰の異常などがみられるものをいう。

「鬱傷」とは、消化機能あるいは循環機能異常の積滞であり、胃腸のうっ滞感、膨満感、便秘、四肢の循環不全（腫張、腫瘤）、などがみられるものをいう。

血傷、痰傷、鬱傷は比較的マトをしほりやすいが、気傷がやや漠然としている。四傷を決めようとする際、血傷があるかどうか、次に痰傷があるかどうか、次に鬱傷があるかどうかを順次みて、いずれにも該当しないものをすべて気傷に含めばよい。

尚、日本で云う気血水は、上記図で示したように、気傷が即ち

気であり、血傷が即ち血であり、痰傷が即ち水である。そして鬱傷は、多くは気と水にわけられ、一部が血にわけられたと考えられる。

## 5 病質理論

中医学の臓腑に関する理論を、臓象学説といい、それによって臓腑の生理、病理を弁証するのが臓腑弁証である。

臓象とは、病のnature又はcharacterによって木、火、土、金、水と五つに分類し、

木は肝臓と胆腑

火は心臓と小腸腑

土は脾臓と胃腑

金は肺臓と大腸腑

水は腎臓と膀胱腑

というふうに、それぞれ臓と腑にわけた。

この臓腑理論は、薬味と薬効の関係を主体に組み立てられた症候群のようなもので、西洋医学の解剖学的臓器ではない。

酸味薬の最大公約数的薬効をもつ薬物を、木性薬とし、この薬効をもつ薬物は酸味でなくても木性薬として、この薬効をもたない薬物は、たとえ酸味であっても木性薬とはみなさない。

苦味薬の最大公約数的薬効をもつ薬物を、火性薬とし、この薬効をもつ薬物は苦味でなくても火性薬として、この薬効をもたない薬物は、たとえ苦味であっても火性薬とはみなさない。

甘味薬、辛味薬、鹹味薬も同様にして土性薬、金性薬、水性薬に関連づけているわけである。

例をとると、人参は、味は甘であり、その薬効は、甘性薬の最

大公約数的薬効であるところの「栄養不良、胃腸障害の改善」を有するので土性薬に入れられる。人参が主薬になって組み立てられている方剤の多くが、脾臓と胃腑の症状に用いられているのは当然なことであり、補脾健胃たるゆえんである。

決明子は、味は甘、苦であり酸味ではないが、眼科的疾患に用いることが多く、酸味薬の最大公約数的薬効であるところの「明目、祛風」を有しているので、木性薬に入れられる。清肝明目である。

木、火、土、金、水の五行があらわす象意を表にて参照されたい。臓が犯された方が重症で器質的、腑は機能的な疾患で軽症、と理解されてさしつかえない。

陰陽五行（易卦も含めて）と云うと、何か迷信じみたもの、あるいは占いの類いのように思われがちだが、そうではなく「分類学」と理解していただきたい。西洋合理主義とは異なった、中国における分類学は、今日に至っても大いに学ぶ価値のあるものである。

臓象について最初に述べられた書物は金匱要略である。「臓腑経絡先后病証証第一」の章に書かれているが、傷寒論・金匱要略を教典のように重んじている日本漢方が、この一章を看過し、あまり取りざたしないのは、江戸時代以降、陰陽五行を捨てざる方向へ進んできたからである。では近年、臓象学説を云々しだした日本中医学派が、この章を正しく理解しているかとなれば、実はそうではなく誤謬をおかしている。例えば、「酸入肝」という一句を、「酸味の薬物は肝経に入る」ととっている。肝経に入るのではなく、あくまでも臓象肝に属するということであり、臓象と経絡を混同している。薬物の五味と薬物帰経を、いつのまにか同一視し

てしまっている。このような錯誤は、日本だけでなく現代中国においても一部にみられるようである。臓腑と経絡と解剖学的臓器は、はっきりと使い分けなければならない。

臓象は病気の性質あるいは病状の分類法で、空間的な分類法である。（病質分類）

経絡は病気の位置あるいは病的段階の分類法で、時間的な分類法である。（病位(期)分類）

解剖学的臓器は、あくまでも西洋医学的臓器の命名にすぎない。しかしながら、あえて臓象を解剖学的臓器に対比してみると、

臓象肝は、肝臓Liver

臓象心は、心臓Heart

臓象脾は、膵臓Pancreas

臓象肺は、肺臓Lung

臓象腎は、副腎Suprarenal body

と、とらえるのが妥当と思われる。

行	味	色	臓	腑	官	体	液	惡	志	変	
木	酸	青	肝	胆	眼	筋	淚	風	怒	握	→ 神経、精神、内分泌
火	苦	赤	心	小腸	舌	脉	血	熱	喜	擾	→ 思考、循環、血液
土	甘	黄	脾	胃	口	肉	唾	湿	思	噦	→ 消化、吸収、栄養
金	辛	白	肺	大腸	鼻	皮	汗	燥	憂	咳	→ 呼吸、排泄、皮膚
水	鹹	黒	腎	膀胱	耳	骨	尿	寒	恐	慄	→ 泌尿、生殖、生命力

↓ ↓  
器質的 機能的

次に臓腑のとらえ方の図によって、さらに詳しい臓腑の症状を述べた。本図では、漢方医学の臓と、西洋医学解剖学的臓器を混同しないように、肝木、心火、脾土、肺金、腎水というふうに五行を附してある。

肝木の症状とは、肝臓と胆腑の症状

心火の症状とは、心臓と小腸腑の症状

脾土の症状とは、脾臓と胃腑の症状

肺金の症状とは、肺臓と大腸腑の症状

腎水の症状とは、腎臓と膀胱腑の症状である。

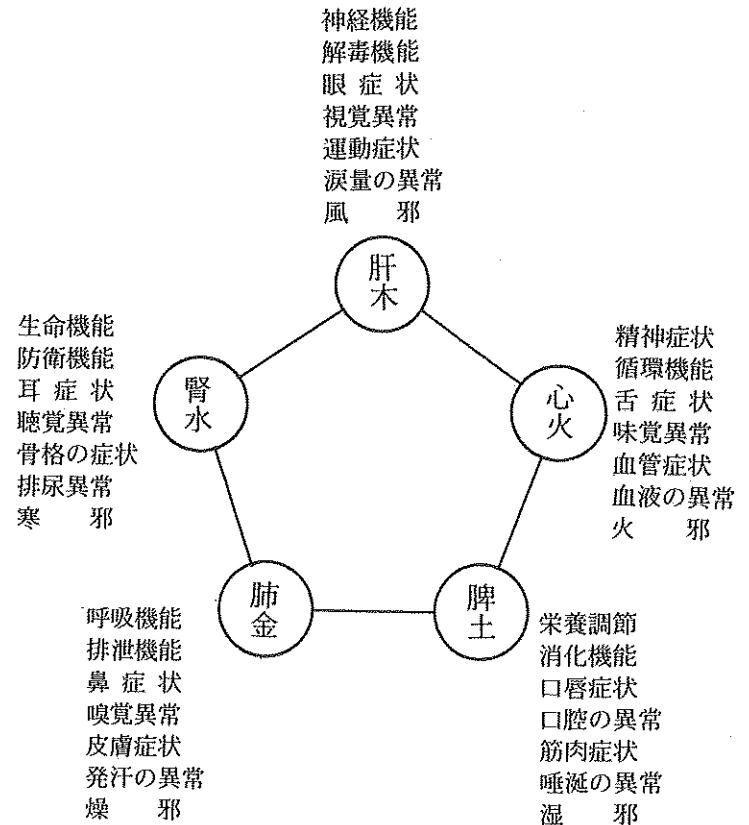
肝臓と胆腑の病気とは、つまり本性薬に鋭敏に反応する症状のことであり、

心臓と小腸腑の病気とは、つまり火性薬に鋭敏に反応する症状のことであり、他の臓腑の病気も同様である。

(付) 三焦腑は、一応心火に属する。三焦腑と云った場合、三焦の機能を意味しており、心肺の輸送配布機能(上焦如霧)、脾胃の消化輸送機能(中焦如漚)、腎膀胱の排尿作用、腸管の排便作用(下焦如瀆)を云う。つまり体内に摂取された水分の行く末を考えればよい。即ち、飲食物が消化吸収(中焦)されたのち、呼吸循環(上焦)によって全身にゆきわたり、汗、尿、便として排泄される。

(下焦) 漢方では、同じ言葉でも部位(病位)を示す場合、経絡症状を示す場合、機能面(臓腑)を云う場合とで、異なることがあるので、何について云っているかをよく吟味してかかる必要がある。

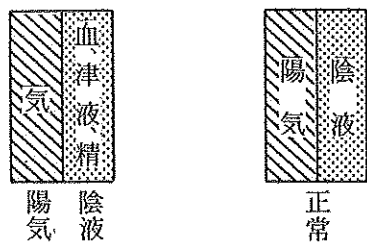
## 臓腑のとらえ方



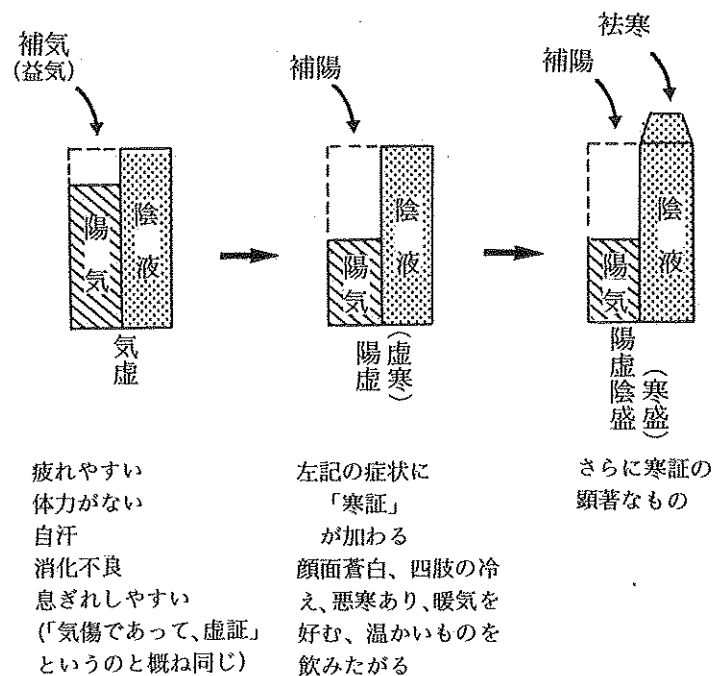
臓腑弁証は、前述した「臓腑のとらえ方」によって、諸々の症状が、まずどの臓腑に該当するかを考え、次にそれら症状が気であるか血であるか、陽であるか陰であるか、虚であるか実であるかをつかみ弁証する。弁証が明らかになれば、おのずから施治が求められ、薬物が選ばれて方剤が決定するというわけである。

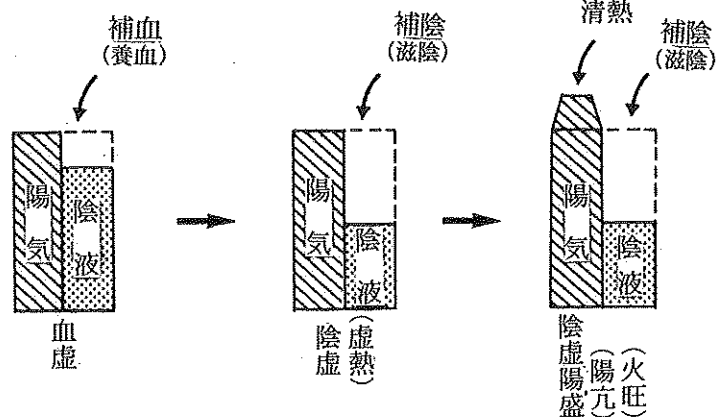
陽は機能的な面をあらわし、「気」と関係が深く「陽気」と表現される。

陰は物質的な面をあらわし、「血、津液、精」と関係が深く「陰液」と表現される。



陽気と陰液のバランスがとれていれば、無病であり、バランスがくずれれば、そのくずれ方を表現して弁証するというわけである。





手足のしびれ  
筋肉の痙攣  
爪がもろい、異常脱毛  
月経困難  
動悸、静脈怒張  
(「血傷であって、虚証」というのと概ね同じ)

左記の症状に  
「熱証」  
が加わる  
顔面紅潮、煩熱、  
熱感あり、冷気  
を好む、口渴、  
冷たいものを飲  
みたがる

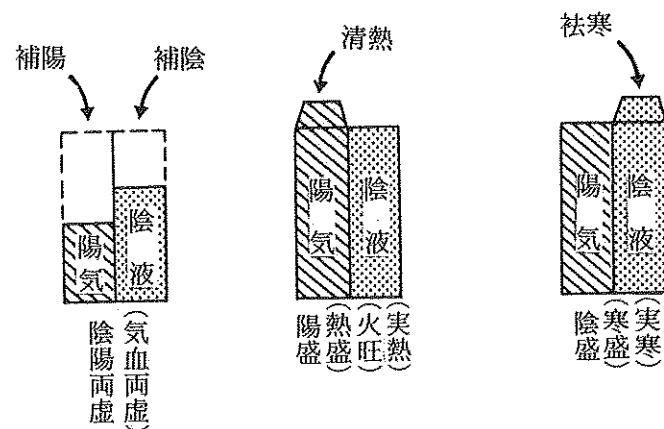
さらに熱証の  
顕著なもの

気虚は陽虚に至る前段階的症状としてとらえ、血虚は陰虚に至る前段階的症状としてとらえられており、病態生理学的観点に立っている。

気虚の症状に寒証が加わって陽虚としているが、いつも寒証が加わるとは限らない。時には気虚の症状に熱証をおびることもある。

血虚の症状に熱証が加わって陰虚としているが、いつも熱証が

加わるとは限らない。時には血虚の症状に寒証をおびることもある。このような場合、「陰陽両虚」あるいは「気血両虚」という用語で表現されている。



陽と陰のどちらにも不足がなくて、ただ熱邪だけが加わった場合は、陽盛であり、熱盛とも火旺とも実熱とも云う。治法は清熱薬を用いる。

陽と陰のどちらにも不足がなくて、ただ寒邪だけが加わった場合は、陰盛であり、寒盛とも実寒とも云う。治法は祛寒薬を用いる。

気虚に対する治法は補気であり、陽虚に対しては補陽を行う。即ち、補気薬、補陽薬を用いる。陽虚陰盛に対しては、補陽薬と同時に祛寒薬をふんだんにもちこむ。

血虚に対する治法は補血であり、陰虚に対しては補陰を行う。即ち、補血薬、補陰薬を用いる。陰虚陽盛に対しては、補陰薬と

同時に清熱薬をふんだんにもりこむ。

気血両虚に対しては、補気薬、補血薬を  
陰陽両虚に対しては、補陰薬、補陽薬を  
同時に用いる。

具体例をあげると、

「胃虚寒」とは、栄養調節、消化機能、口唇症状、口腔の異常、  
筋肉症状、唾涎の異常、湿邪と云われる症状などの領域において、  
器質的障害を除いた腑の分野にて虚寒即ち虚証で寒証を呈している  
ので、施治は温胃建中であり、人参湯、安中散の適応となる。

	味	臓象	帰経
人参湯	人参→甘苦,	脾土,	肺、脾
	白朮→甘苦,	脾土,	胃、脾
	乾姜→辛,	肺金、脾土,	肺、心、胃、脾、腎
	甘草→甘,	脾土,	十二経

人参湯に含まれる四味は、いずれも臓象が脾土に属し、甘草を  
除けば、他の三味はすべて補薬で温薬である。温胃健中たるゆえ  
んである。ちなみに、この方剤がどの程度までの経絡症状を治せ  
るかと言えば、脾経の症状に有効であると云える。即ち営分用で  
あり、太陰病であり、中焦の病気に適することになる。「病位対  
照表」参考)

	味	臓象	帰経	薬性
安中散	桂枝→辛甘,	肺金、脾土,	膀胱、肺、心,	温補
	延胡索→辛苦,	肺金、心火,	肺、脾、肝,	温中
	良姜→辛,	脾土,	胃、脾,	熱補
	牡蛎→鹹,	肝木、腎水,	胆、腎、肝,	平補
	縮砂→辛,	脾土,	胃、脾、腎,	温補
	茴香→辛,	脾土,	胃、脾、腎、肝,	温補
	甘草→甘,	脾土,	十二経,	平平

安中散に含まれる薬味は、桂枝、縮砂、茴香が芳香性健胃薬、  
良姜が辛辣性健胃薬であり、延胡索は鎮痛、牡蛎は胃酸過多中和、  
甘草は緩和が目的として組み入れられており、消化器疾患特に胃  
アトニー様症状を目標にしている。おのずから臓象は脾土に属す  
るとわかる。薬性は、ほとんどが温補であり、方剤全体も当然、  
温補作用を発揮するから、胃虚寒を治すことができる。さて、安  
中散はどこまでの経絡症状に有効であろうか。安中散の中は、も  
とも中焦を意味している。脾経ととっても悪くはないだろうが、  
本書では、大腸経までととっている。脾経は、中焦の営分であり  
大腸経は、中焦の気分である。方剤全体の効果は営分を治すには、  
今一步というところであり、胃経、小腸経、三焦経、大腸経とし  
た。即ち、気分用であり、太陰病であり、中焦の病気に適するこ  
とになる。

「肺陰虚」とは、呼吸機能、排泄機能、鼻症状、嗅覚異常、皮  
膚症状、発汗の異常、燥邪と云われる症状などの領域において、  
陰が虚している。即ち血虚と熱証を呈している状態であり、施治  
は滋陰潤肺あるいは清熱化痰であり、薬味、薬物の臓象五行、薬

## 第 2 章

# 証 と 薬 物

性などから、麦門冬湯、滋陰至宝湯の適応となる。

「肝陰虚」とは、神経機能、解毒機能、眼症状、視覚異常、運動症状、涙量の異常、風邪と云われる症状などの領域において、陰が虚している。即ち血虚と熱証を呈している状態であり、施治は滋陰平肝であり、薬味、薬物の臓象五行、薬性などから、加味逍遙散の適応となる。

「心火旺」とは、精神症状、循環機能、舌症状、味覚異常、血管症状、血液の異常、火邪と云われる症状などの領域において、火旺即ち陽盛のことであり、熱証と実証を呈している状態であり、施治は清心瀉火であり、薬味、薬物の臓象五行、薬性などから、黄連解毒湯、三黄瀉心湯の適応である。

「腎陽虚」とは、生命機能、防衛機能、耳症状、聴覚異常、骨格の症状、排尿異常、寒邪と云われる症状などの領域において、陽が虚している。即ち気虚と寒証を呈している状態であり、施治は温補腎陽であり、薬味、薬物の臓象五行、薬性などから、八味地黄丸、右帰飲、右帰丸の適応である。



本書で扱った薬物の整理法は、基源、部位、成分、薬効、味、薬性薬向、臓象五行、薬物帰經の順に一覧表にした。一覧表をのせる前に、このような分類法以外の分類について、まず述べる。

中国における最初の薬学専門書である「神農本草經」は、薬物を上薬、中薬、下薬と三種類にわけている。

上薬とは、いくら多く服用しても、又長期間服用しても、体に害がないとされているもので、害がないばかりでなく、体にいい作用をあたえ不老延年をのぞめるとしている。上薬として一二〇種の薬物があげられている。

中薬とは、病気をなおす場合と体が虚弱である場合にのみ服用し、体が普通であれば、なるべく服用しないほうがよいとされているもので、これも一二〇種の薬物があげられている。

下薬とは、毒が多いので長い期間服用しないほうが、よいもので、病気のときだけ使用し、たとえ全快しなくても、ある期間服用した後は、休薬すべきとされているもので、これは一二五種あげられている。

上薬には

阿膠、茵陳蒿、黄耆(芪)、黄連、遠志、瓜子、滑石、甘草、龜甲、枸杞、決明子、牛黄、五加皮、牛膝、胡麻、五味子、細辛、酸棗仁、地黄、麝香、沙参、蛇床子、車前子、升麻、大棗、沢泻、丹参、天門冬、菟絲子、杜仲、独活、人参、麦門冬、白朮、茯苓、文蛤、防風、牡蛎、薏苡仁、竜骨、などがある。

中薬には、

淫羊藿、黄芩、葛根、枳実、玄参、厚朴、呉茱萸、犀角、山茱萸、梔子、芍薬、水銀、赤小豆、石膏、桑白皮、竹葉、知母、猪苓、敗醬、貝母、百合、防己、牡丹、麻黄、竜眼、鹿茸、などがある。

下薬には、

烏頭、甘遂、桔梗、蜀漆、旋覆花、大黃、大戟、代赭石、桃核、白頭翁、巴豆、半夏、附子、射干、連翹、などがある。

この分類法は、病氣や症状に対する薬効よりも、服薬期間による薬物蓄積の影響に主眼がおかれている。言わば、服薬期限分類法である。しかし、この分類法はそのまま信じることができず、ある人には上薬であっても、別の人には中薬になってしまうことがありうるし、上薬に組み入れられているが本来は中薬であろうと思われるもの、下薬に組み入れられているが中薬としてよさそうなものなどがある。

「神農本草經」が書かれたのは、秦・漢時代であり、後漢以前の薬物学を集大成したものである。「傷寒論」が書かれた頃とほぼ同年代である。それからへだたること約一千年、金元四大家が輩出し、六淫四傷という病因概念が確立された。次に、六淫四傷と現代の中医薬方分類法を対比してみる。

#### 六淫四傷と薬物

六淫をなおすために用いられる薬物は

風邪をなおす薬物を祛風薬

寒邪をなおす薬物を祛寒薬

暑邪をなおす薬物を解暑薬

火邪をなおす薬物を泻火薬

燥邪をなおす薬物を潤燥薬

湿邪をなおす薬物を燥湿薬

と、それぞれ名づけられている。

代表的なものを挙げると、

祛風薬には

麻黄 桂枝 紫蘇葉 荊芥 防風 白芷 細辛 葱白 香薷  
辛夷

などが辛温解表薬としてあり、

薄荷 牛蒡子 蟬退 菊花 葛根 柴胡 升麻

などが辛涼解表薬としてあり、

独活 羌活 威靈仙 清風藤 秦艽 蒼朮

などが祛風湿薬としてある。

さらに

羚羊角 釣藤鈎 天麻 蒺藜子 地竜

などが熄風鎮痙薬として入れられる。

祛寒薬には

附子 乾姜 良姜 蜀椒 丁香 茴香 肉桂 吳茱萸 胡椒

などが温裏祛寒薬としてある。ほかに

桂枝（辛温解表薬） 生姜（理気薬）

なども入れられる。広義には

肉苁蓉 淫羊藿 益智仁 杜仲 冬虫夏草 巴戟天 仙茅

続断 菟絲子 陽起石

などの補陽薬も入れられよう。

解暑薬には、

荷葉 緑豆 西瓜 白扁豆 青蒿

などが清熱解暑薬としてある。

泻火薬には、

石膏 知母 山梔子 竹葉 夏枯草 芦根 決明子 熊胆

などが清熱泻火薬としてあり、

黄芩 黄連 黄柏 竜胆 苦参

などが清熱燥湿薬としてある。さらに

金銀花 連翹 魚腥草 山豆根

などが清熱解毒薬としてある。広義には

大黄 センナ アロエ 芒硝

などの攻下薬や、

沙参 天門冬 麦門冬 石斛 百合

などの補陰薬も入れられよう。

潤燥薬には

芒硝（攻下薬） 麻子仁（潤下薬） 杏仁（止咳平喘薬）

人参（補気薬） 山薬（補気薬） 膠飴（補気薬） 生地黃

（清熱涼血薬） 麦門冬（補陰薬） 天門冬（補陰薬） 桔

梗根（清熱化痰薬） 知母（清熱泻下薬） 葛根（辛涼解表薬）

などが挙げられる。

燥湿薬には

茯苓 猪苓 沢瀉 茵陳蒿 木防己 漢防己 滑石 薏苡仁

冬瓜子 木通 車前子 赤小豆

などが利水滲湿薬としてあり、

甘遂 芫花 大戟 巴豆

などが峻下逐水薬としてある。さらに

藿香 厚朴 縮砂

などが芳香化湿薬としてある。祛風薬で挙げた祛風湿薬、泻下薬で挙げた清熱燥湿薬などもこれに該当する。

四傷をなおすために用いられる薬物は、

気傷をなおす薬物を理気薬（気薬）

血傷をなおす薬物を理血薬（血薬）

痰傷をなおす薬物を化痰薬（痰薬）

鬱傷をなおす薬物を化鬱薬（鬱薬）

と、それぞれ名づけられている。これを分かり易く云えば、

気薬は気の循環を良くし、体内の諸機能をととのえる薬

血薬は血液の循環を良くし、血液の循環異常にもとづく諸症状を解消する薬

痰薬は水分代謝障害を除き、それにもとづく呼吸器や消化器の諸症状を解消する薬

鬱薬は消化器障害（主に鬱滞症状）を良くし、それにもとづく気の滞りを解消する薬ということになる。代表的なものを挙げると、

気薬（理気薬）には

陳皮 枳実 香附子 木香 烏薬 薤白 柿蒂 大腹皮 生姜などが「気滞」に対する理気薬として、また広義には

人参 黄耆（芪） 山薬 白朮 大棗 甘草 膠飴 党参 黄精などが「気虚」に対する補気薬として入れられる。

血薬（理血薬）には

三七 大蓟 小蓟 艾葉 茅根 仙鶴草 阿膠などが「出血」に対する止血薬としてあり、

川芎 丹参 延胡索 鬱金 益母草 赤芍 桃仁 紅花

莪朮 三棱 乳香 没薬 牡丹皮 牛膝 蘇木 姜黄 水蛭

蜚虫 五靈脂

などが鬱滞した血液症状、即ち「瘀血」を駆逐する駆瘀血薬または活血薬としてある。さらに

熟地黃 何首烏 当帰 白芍 枸杞子 竜眼肉

などが「血虚」に対する補血薬としてある。広義には

犀角 生地黄 玄参 紫根 地骨皮

などの「血熱」に対する清熱涼血薬も入れられる。

痰薬（化痰薬）には、

前胡 貝母 栝楼根 栝楼仁 竹筴 昆布 海藻

などが熱痰、燥痰に対する清熱化痰薬としてあり、また

半夏 天南星 旋覆花 桔梗 皂角

などが寒痰、湿痰に対する温化寒痰薬としてある。さらに

杏仁 紫菀 蘇子 枇杷葉 桑白皮

などが咳嗽、呼吸困難に対する止咳平喘薬として入れられる。

以上のほかに、他の分類に配されているが、呼吸器や消化器の水分異常に使われる潤燥薬、燥湿薬も広義に入れることができる。

鬱薬（化鬱薬）という分類は、日本ではなじみがなく、また現代中国においても細分類ないしは諸々の分類に配せられておりこれを挙げることは少し難しいようであるが、主なものとしては、

山楂子 麦芽 神曲

などが食滯に対する消導薬としてある。ほかにあげれば

寒証の消化器症状に対する温裏祛寒薬（祛寒薬の項）、中焦湿邪に対する芳香化湿薬（燥湿薬の項）などがこの範疇に入れられる。

以上で、六淫に対処して用いられる薬と四傷に対処して用いられる薬とを、現代の中医薬方分類に則して対比してみたが、今まで述べた以外に、固渋薬、安神薬、芳香開竅薬というのがある。

## 固渋薬

収渋薬とも言い、脱（滑脱）を固くしめる作用を有する薬物をこの分類に入れる。脱とは、抜けおちておさまらない現象を言い多くは、慢性病による衰弱や、あるいは泻下薬、発散（汗）薬等の過量服用によって生ずるので、その現われる症候は、ほとんど虚証に属する。たとえば、脱肛、子宮脱、性器出血、帯下、遺精、自汗盗汗、大小便、失禁等で、これらは固渋薬を用いて対処する。

山茱萸 五味子 烏梅 赤石脂 诃子 肉豆蔻 蓮子

五倍子 浮小麦 麻黄根 烏賊骨

などがこれに入れられている。

本書「薬向から出た分類」の「散、収」で述べる散的症状に対して収（性）薬を用いるのと、ほぼ同義である。即ち、固渋薬は、すべて収（性）薬である。

## 安神薬

精神が落ち着かないのを治療する薬であり、精神不安、煩躁、不眠などに用いる。

### (1) 重鎮安神薬

鉱石類、貝殻類の薬物を使用すると、これらは、質が重いから精神を鎮め、落ち着かせることができると古人は考えた。

竜骨 牡蛎 磁石 真珠 紫石英 朱砂 代赭石

などが入れられている。

### (2) 養心安神薬

陰虚のため精神が不安定な状態にあるのを治療する方法で、主に、心肝の虚証に用いる。

酸棗仁、柏子仁、遠志

などが入れられている。

本書「薬向から出た分類」の「升、降」で述べる升的症状に対して降(性)薬を用いるのと、ほぼ同義である。即ち、安神薬のほとんどは、降(性)薬である。

### 芳香開竅薬

芳香開竅薬は主に「閉証」に用いる。病邪が体内に閉ざされてしまった状態を、古人は閉証と名づけ、意識混迷、牙関緊急(口禁)、両手を強く握りしめる、しきりに痰やよだれを出す、等の症状を言う。

閉証には、熱閉(陽閉)と寒閉(陰閉)がある。

#### (1) 熱閉(陽閉)

煩躁 譫語 熱性痙攣 顔面紅潮 呼吸促迫 舌苔黄 数脈などの熱証を呈し高熱をとまなうことが多く、日本脳炎 流行性脳脊髄膜炎 敗血症 重症肺感染症 肝性昏睡 尿毒症 脳血管障害 日射病 熱射病 などで見られる。

熱閉には、

竜腦、牛黄

などがあり、清熱解毒薬を配合して涼開法を用いる。

#### (2) 寒閉(陰閉)

顔面蒼白、体熱の不足(冷汗)、流涎、舌苔白、遲脈、などの寒証を呈し、悪寒をとまなうことが多く、脳血管障害、中毒、などで見られる。寒閉には、

麝香、菖蒲、蘇合香、安息香

などがあり、辛温行気薬を配合して温開法を用いる。

芳香開竅薬は、中枢神経興奮作用、あるいは、強心作用のいずれかを有している。

(付) 薬向から出た分類法で、症状の方向をとらえた概念として、升一降、散一収がある。升一降は上下的偏向であり、散一収は内外的偏向である。

### 薬向から出た分類

(症状の方向をとらえた概念)

#### (一) 上下的偏向

升降	升一升的症状
	症状が上へ向うもの、あるいは降りるべきものが降らない症状
	嘔吐 喘咳 鼻出血 便秘 月経困難 尿不利 高血圧 興奮 のぼせ 吐血 咯血
	降薬(杏仁、半夏、厚朴、酸棗仁等)を用いて治す
升降	降一降的症状
	症状が下へ向うもの、あるいは上がるべきものが上がらない症状
	下利 多尿 帶下 月経過多 痔 低血圧 習慣性流産 下血 脱力
	升薬(升麻、地黄、人參、乾姜等)を用いて治す

## (二) 内外的偏向

散収	散一散的症状
	発汗作用 分泌作用 新陳代謝などの亢進症状 (発散のゆきすぎ)
	多汗 嘔吐 下痢 下血 頻尿 遺精 そう病 帯下心悸 咯血
	収薬 (竜骨、牡蛎、阿膠、小麦等) を用いて治す。
	収一収的症状
	発汗作用 分泌作用 新陳代謝などの抑制症状 (収斂のゆきすぎ)
	無汗 便秘 尿量減少 過少月経 うつ病 食滯
	散薬 (麻黄、葛根、防風、薄荷等) を用いて治す

## 薬物分類表について

薬性・薬向の覧は、順に、熱寒 (温涼)、補泻、燥潤、升降、散収とし、各薬物について特に重要な薬性薬向をゴシック体で示した。熱寒の程度は詳細には、大熱、熱、温、微温、平、涼、微寒、寒、大寒、というように分けられているが、本書では、熱、温、平、涼 寒の五段階とした。平は、平性でどちらにも偏しないもので、中は、中性で両方の性質を持つものである。

生薬名	基 源	部位	成 分
あ 阿 膠	ウマ科 ロバ	皮	gelatin collagen
い 威 靈 仙	キンポウゲ科 テッセン	根	Anemonin Anemonol
いん 菌 陳 蒿	キク科 カワラヨモギ	若葉 果穂	capillen, capillonな どのテルペン化合物 他
いん 淫 羊 藿	メギ科 ホザキノイカリソウ	葉 (枝、茎)	icariine $C_{33}H_{42}O_{16}$ (フラボノール配糖 体)
うい 茴 香	セリ科 ウイキョウ	果実	anethole $C_{10}H_{12}O$ を 含む精油、リノール 酸
う 鬱 金	ショウガ科 ウコン	根茎	curcumin $C_{21}H_{21}O_6$ セスキテルペン
う 烏 賊 骨 (かいひょうしやう 海螵蛸)	イカ科 コウイカ	甲	燐酸カルシウム、炭 酸カルシウム、膠質
う 烏 梅	バラ科 ウメ	未熟果	クエン酸、リンゴ酸、 コハク酸、酒石酸
う 烏 薬	クスノキ科 テンダイウヤク	根	linderane $C_8H_{12}O_2$ 結晶性芳香性物質

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
補血、止血、滋陰、 潤燥	甘	平補潤降収	心火 肺金	肺、腎、 肝
利尿、通経、鎮痛、 祛風湿	苦	温泻燥降散	肺金	膀胱
利胆、利尿、解熱、 消炎、黄疸の要薬	苦	寒泻燥降散	肝木	胆、胃、 脾、肝
強壯、強精、降圧、 調経、祛風寒湿	辛、甘	温補燥升散	腎水	腎、肝
芳香性健胃、整腸、 鎮吐、駆風	辛	温補燥中散	脾土	胃、脾、 腎、肝
利胆、健胃、利尿、 解鬱、鎮痛、通経(カ レー粉、沢庵漬)	辛、甘	寒泻燥中散	肝木	肺、心、 肝
止血、収斂、止泻、 制酸、排膿	鹹	温補燥升収	腎水	腎、肝
収斂、助酸、止渴、 殺中、止泻、祛痰	酸	温補潤降収	肝木	肺、大 腸、脾、 肝
興奮、行気、辛辣性 健胃、消化、鎮痛	辛	温補燥升散	脾土	膀胱、 肺、脾、 腎

生薬名	基 源	部位	成 分
延 胡 索 めんごさく	ケシ科 エンゴサク	塊茎	corydalis
黄 耆 おうぎ	マメ科 キバナオウギ	根	folic acid cholin
黄 芩 おうこん	シソ科 コガネバナ	根	baicalein
黄 柏 おうぱく	ミカン科 キハダ	樹皮	berberine obakunon $C_{26}H_{30}O_7$
黄 連 おうれん	キンポウゲ科 オウレン	根茎	berberine palmatine
遠 志 かんじ	ヒメハギ科 イトヒメハギ	根	saponin tenuifolin
海 藻 かいそう	ホンダワラ科 ホンダワラ	全草	ヨード
薤 白 かいぱく	ユリ科 ラッキョウ	地下 鱗茎	flactan scorodose
艾 葉 かいよう	キク科 ヨモギ又はヤマヨモギ	若葉	cineol cuprol

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
鎮痛、鎮痙、調経、 活血	辛、苦	温中燥平散	肺金 心火	肺、脾、 肝
強壯、滋養、潤肌、 止汗、利尿、排膿	甘	温補中升中	脾土	肺、脾
解熱、消炎、利尿、 健胃、鎮吐、降圧	苦	寒泻燥降収	心火	肺、心、 胆、小 腸、大 腸
解熱、消炎、健胃、 利尿、利胆、制性	苦	寒泻燥降収	心火	膀胱、 大腸、 腎
解熱、消炎、降圧、 健胃、鎮吐	苦	寒泻燥降収	心火	心、胆、 胃、大 腸、肝
鎮静、強壯、祛痰	苦、辛	温補燥降散	心火	肺、心、 腎
消腫、散瘤、利尿	鹹、苦	寒泻燥降散	腎水	胃、腎、 肝
健胃、整腸、祛痰、 治胸痺	辛、苦	温中潤降散	肺金	肺、胃、 大腸
止血、調経、散寒、 除湿、止痛	苦	温泻燥平中	心火	脾、腎、 肝



生薬名	基 源	部位	成 分
夏 枯 草 か せ ち ぞう	シソ科 ウネボグサ	花穂	水溶性無機塩類 prunellin
何 首 烏 か しゅう う	タデ科 ツルドクダミ	塊状根	anthraquinone rhein
か つ 香 香	シソ科 カワミドリ	全草	揮発性精油 tannic acid
か つ 根 葛	マメ科 クズ	根	イソフラボン誘導体
か つ せき 滑 石	天然粘土鉱物 珪酸塩類	滑石の 細粉	含水珪酸アルミニウム 含水珪酸マグネシウム ( $3\text{MgO} \cdot 3\text{SiO}_2 \cdot \text{H}_2\text{O}$ )
か ろ こん 括 楼 根 (天花粉)	ウリ科 キカラスウリ	根	Amino acid Saponin
か ろ じん 括 楼 仁	ウリ科 キカラスウリ	種子	脂肪油 trichosanic acid
かん きょう 乾 姜	ショウガ科 ショウガ	根茎 (蒸して 乾燥)	精油 gingerol
かん せう 甘 草	マメ科 カンゾウ	根	glycyrrhizin glucose

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
解熱、消炎、利尿、 降圧、散結、眼痛	苦、辛	寒瀉燥降散	肝木	胆、肝
滋養、強壯、補血、 鎮痒	苦、甘	温補平升収	腎水	腎、肝
発汗、解熱、健胃、 鎮吐	辛	温瀉燥降散	肺金 脾土	肺、胃、 脾
発汗、解熱、止渴、 鎮痛	辛、甘	平中潤升散 (金の瀉薬、 土の補薬)	肺金 脾土	膀胱、 胃、脾
利尿、消炎、止渴、 吸着、通淋	甘	涼中燥降散	腎水 脾土	膀胱、 胃
清熱、生津、鎮咳、 排膿、消腫、催乳	甘、酸	寒瀉潤降収	肺金 脾土	肺、胃
消炎、鎮咳、祛痰、 鎮痛、通便、排膿	苦	寒中潤降散	肺金 脾土	肺、胃、 大腸
興奮、強壯、鎮痛、 辛辣性健胃、回陽救 逆	辛	温補燥升散	肺金 脾土	肺、心、 胃、脾、 腎
緩和、解毒、鎮痙、 止渴	甘	平平潤平収	脾土	十二経

生薬名	基 源	部位	成 分
き 桔 きよう 梗	キキョウ科 キキョウ	根	saponin platycoside
き 菊 か 花	キク科 キク	頭状花	揮発性精油 adenine $C_5H_5N_5$
き 枳 じつ 実	ミカン科 ダイダイ	未熟果	limonene l-linalool
きよう 羌 かつ 活	セリ科 キョウカツ	根茎	揮発性精油
きよう 杏 にん 仁	バラ科 アンズ	種子	amygdalin $C_{20}H_{27}O_{11}N_1$ 脂肪油
きん 金 ぎん 銀 か 花	スイカズラ科 スイカズラ	花	luteolin $C_{15}H_{10}O_6$ inositol $C_6H_{12}O_6$
く 枸 記 じ 子	ナス科 クコ	成熟果	betaine $C_5H_{11}O_2N$ カルシウム、リン、鉄
く 苦 じん 参	マメ科 クララ	根	アルカロイド matrine oxymatrine
りい 荊 かい 芥	シソ科 ケイガイ	花穂 茎枝	l-menthol dl-menthol

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
祛痰、排膿、鎮咳、 消炎	辛、苦	平泻平升散	肺金	肺
解熱、消炎、鎮静、 解毒、排膿、降圧、 明目	甘、苦	涼泻燥降散	肝木	肺、肝
泻下、健胃、消化、 利胆	苦、酸	寒泻燥降散	肺金 脾土	胃、脾
発汗、鎮痛、祛風	辛、苦	温泻燥升散	肺金	膀胱、 腎
鎮咳、祛痰、平喘、 潤肺、潤腸	苦	温泻潤降散	肺金	肺、大 腸
解熱、消炎、解毒、 排膿	甘	寒泻燥降散	脾土	肺、心、 胃、脾
興奮、強精、強壯、 補血、明目	甘	平補潤升収	腎水 肝木	腎、肝
解熱、消炎、解毒、 利尿、殺虫、健胃(皮 膚外用)	苦	寒泻燥升中	心火	心、胃、 小腸、 大腸、 肝
発汗、鎮瘡、祛風、 透疹、止痒	辛	温泻燥降散	肺金	肺、肝

生薬名	基 源	部位	成 分
桂 枝	クスノキ科 ケイ	若枝	cinnamic aldehyde $C_9H_8O$ など を含むcineol
肉 桂	クスノキ科 ケイ	樹幹皮	cinnamic aldehyde cinnamyl acetate
決 明 子	マメ科 エビスグサ	種子	アントラキノン誘導 体 ナフトピロン誘導体
玄 参	ゴマノハグサ科 ゴマノハグサ	根	halpagide linolic acid
膠 飴 (飴糖)	粳米、糯米、大麦、 小麦等の澱粉に麦 芽を加えて製成	(飴糖)	麦芽糖 蛋白質
紅 花	キク科 ベニバナ	花卉	紅色色素carthamin 黄色色素 saflor- yellow
香 豉 (豆豉)	マメ科 クロダイズ	成熟 種子	蛋白質 酵素
香 薷	シソ科ナギナタコ ウジュ (江香薷又 は青香薷)	全草	elsholzone sesquiterpene
香 附 子	カヤツリグサ科 ハマスゲ	根茎	cyperol $C_{15}H_{24}O$ cyperene $C_{15}H_{24}$

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
解表、鎮痛、通陽利 水、芳香性健胃、温 経通絡	辛、甘	温補燥升散	肺金 脾土	膀胱、 肺、心
散寒止痛、補陽虚、 芳香性健胃、温腎祛 寒	辛、甘	熱補燥升散	肺金 脾土	脾、腎、 肝
消炎、緩下、利尿、 降圧、明目	甘、苦	涼泻燥降散	肝木	胆、肝
清熱、生津、止渴、 消炎、涼血散血、降 圧	苦、鹹	寒補潤降散	腎水	肺、胃、 腎
強壯、緩和、滋養	甘	温補潤升収	脾土	肺、胃、 脾
調経、活血、鎮痛(染 料口紅)	辛	温泻潤降散	心火	心、肝
発汗、解熱、消炎、 健胃、除煩	苦	寒補潤降散	肺金	肺、胃
発汗、健胃、鎮吐、 利尿	辛	温泻燥降散	肺金	肺、胃
芳香性健胃、調経、 鎮痛、開鬱	辛	平補燥降散	肝木	小腸、 肝

生薬名	基 源	部位	成 分
こ べ 粳 米	イネ科 イネ (玄米)	果実	澱粉、脂肪、ビタミンB <sub>1</sub>
こ ば 厚 朴	モクレン科 ホウノキ	樹幹皮	magnocurarin C <sub>19</sub> H <sub>25</sub> O <sub>4</sub> N magnol C <sub>18</sub> H <sub>18</sub> O <sub>2</sub>
ご ぎ 牛 黄	ウシ科 ウシ	胆石	cholic acid bilirubin
ご げ 牛 膝	ヒユ科 イノコズチ	根	saponin カリウム 粘液質
ご じゅ 臭 菜 黄	ミカン科 ゴシュユ	味実	evodin C <sub>26</sub> H <sub>30</sub> O <sub>8</sub> evodene C <sub>10</sub> H <sub>16</sub>
ご しょう 胡 椒	コショウ科 コショウ	果実	piperine piper oil
ご ぼう 牛 蒡 子	キク科 ゴボウ	果実	arctiin 脂肪油
ご ま 胡 麻	ゴマ科 ゴマ	種子	脂 肪 油、olein linolein、palmitin、 stearin
ご み 五 味 子	モクレン科 チョウセンゴミシ	果実	精油 (citral) 有機酸類

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
滋養、緩和	甘	涼補潤降散	脾土	胃、脾
苦味性健胃、行気降逆、鎮吐、平喘、鎮痙	苦、辛	温泻燥降散	肺金 脾土	肺、胃、 大腸、 脾
解熱、解毒、鎮痙、鎮静、開竅、強心	苦	涼泻平降散	心火	心、肝
調経、活血、鎮痛、利尿、通淋、降圧	苦、酸	寒中燥降散	肝木	腎、肝
苦味性健胃、鎮痛、鎮吐、降気、温中散寒	辛、苦	熱中燥降散	脾土	胃、脾、 腎、肝
辛熱性健胃、鎮痛、止瀉	辛	熱中燥升散	脾土	胃、大腸
祛痰、解毒、排膿、消炎、透疹	辛	寒泻潤降散	肺金	肺、胃
滋養、強壯、潤燥滑腸	甘	平補潤降散	腎水	肺、脾、 腎、肝
鎮咳、祛痰、止汗、強壯、渋精	酸	温補潤降収	肝木	肺、腎

生薬名	基 源	部位	成 分
さい かい 犀 角	サイ科 クロサイ	角	炭酸カルシウム リン酸カルシウム valine、threonine
さい こ 柴 胡	セリ科 ミシマサイコ	根	saikosaponin A, C, D $\alpha$ -Spinasterol
さい い 細 辛	ウマノスズクサ科 ウスバサイシン	根	methyl-eugenol
さん ぎ と 山 査 子	バラ科 サンザシ	果実	トリテルペノイド malic acid citric acid
さん し し 山 梔 子	アカネ科 クチナシ	果実	カロチノイド色素 crocin $C_{44}H_{64}O_{24}$
さん しゅう 山 菜 蓂	ミズキ科 サンシュユ	果肉	cornin、gallic acid malic acid
さん しょう 山 椒 (蜀椒) (川椒)	ミカン科 サンショウ	果実	$\alpha$ -sanshool $\beta$ -sanshool 精油
さん ざ こん 山 豆 根	マメ科 広豆根	根	matrine oxymatrine
さん そう どん 酸 棗 仁	クロウメモドキ科 サネブトナツメ	種子	saponin 脂肪油 $\beta$ -sitosterol

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰 経
解熱、解毒、強心、 涼血、止血	苦、酸	寒泻燥降散	心火 肝木	心、胃、 肝
解熱、消炎、解鬱、 鎮静	苦	寒泻燥升散	肝木	胆、肝
鎮痛、平喘、祛風、 平喘	辛	温泻燥降散	肺金	肺、心、 腎
健胃、消化、止泻、 止渴、血管拡張	甘、酸	温泻潤平中	脾土 肝木	胃、脾、 肝
解熱、消炎、利胆、 止血、鎮静、降圧	苦	寒泻燥降収	心火 肝木	肺、心、 胃、肝
補血、強壯、止汗、 止尿、渋精、収斂	酸	温補潤降収	腎水	腎、肝
辛熱性健胃、鎮痛、 鎮吐、止泻、殺虫	辛	熱補燥升散	肺金	肺、胃、 脾、腎
解熱、消炎、解毒、 消腫	苦	寒泻平平散	心火	肺、心
鎮静、催眠、止汗	甘、酸	平補潤降散	心火	心、胆、 脾、肝

生薬名	基 源	部位	成 分
さん 薬 山 葉	ヤマノイモ科 ヤマノイモ	根茎	mucine arginine choline、saponin
じ 地 しょう 黄 (生)	ゴマノハグサ科 アカヤジオウ	根	mannitol glucose
じ 地 じゅう 黄 (熟)	同 上	同上	同 上
じ 地 こつ 骨 皮	ナス科 クコ	根皮	bataine tannic acid
し 紫 こん 根	ムラサキ科 ムラサキ	根	acetyl shikonin $C_{18}H_{18}O_6$
じ 磁 せき 石	鉱物	磁鉄鉱	四三酸化鉄 $Fe_3O_4$
し 紫 そ 蘇 よう 葉	シソ科 シソ	葉	perilla aldehyde $C_{10}H_{14}O$
しゃくしょうず 赤 小 豆	マメ科 アズキ	種子	palmitic acid stearic acid saponin
しゃく 芍 薬 (白芍)	キンポウゲ科 シャクヤク	根 (外皮を去 ったもの)	ペオニフロリン 安息香酸、樹脂

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
滋養、強壯、止瀉、 治消渴	甘	平補潤升収	脾土	肺、脾
滋潤(養)、清津、排 毒、制性、止血、血 糖降下	甘	(鮮)寒瀉潤 升収(乾)寒 補潤升収	脾土 腎水	心、腎、 肝
滋潤(養)、止汗、止 尿、強壯、補血、血 糖降下	同上	温補潤升収	腎水 脾土	心、腎、 肝
解熱、生津、鎮咳、 祛痰	甘	寒中潤中収	心火 脾土	肺、腎、 肝
解熱、消炎、解毒、 涼血、透疹	鹹、甘	寒瀉潤降散	肝木	心、肝
鎮静、補血、耳鳴、 耳聾	辛、鹹	寒瀉燥降収	腎水	腎、肝
発汗、解熱、鎮咳、 解魚蟹毒	辛	温瀉燥降散	肺金	肺、脾
利尿、消炎、解毒、 消腫	甘、酸	平瀉燥降散	心火	心、小 腸
鎮痛、鎮痙、鎮静、 強壯、緩和	苦、酸	(生)涼補潤 降収(炒)平 補潤降収	肝木	肝

生薬名	基 源	部位	成 分
芍 薬 (赤芍)	キンポウゲ科 シャクヤク	根	ペオニフロリン 安息香酸、樹脂
沙 参	キキョウ科 ツリガネニンジン	根	サポニン、精油、澱粉
車 前 子	オオバコ科 オオバコ	種子	plantenolic acid コハク酸
縮 砂	ショウガ科 シュクシャ	果実	borneolなどの精油
生 姜	ショウガ科 ショウガ	根茎	ジングロール ジンギベロール
小 麦	イネ科 コムギ	種子	澱粉、蛋白質、脂肪、 リン、カルシウム、 ビタミンB
升 麻	キンポウゲ科 サラシナショウマ	根茎	cimitin $C_{20}H_{34}O_7$ salicylic acid
辛 夷	モクレン科 コブシ	蕾	citral、eugenol、精油
神 曲	小麦粉、赤小豆粉、 杏仁泥、青蒿汁、 蒼耳汁、蓼汁	(左記 混和) 発酵	amylase、酵母菌、 VitaminB

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
鎮痛、鎮痙、鎮静、 活血、調経、消腫	苦	涼泻潤降収	肝木 心火 肺金	肝
清熱、生津、止咳祛 痰	甘、苦	涼補潤平散	脾土	肺、腎
利尿、通淋、止泻、 明目、鎮咳祛痰	甘	寒泻燥降散	腎水 脾土	肺、小 腸、腎、 肝
芳香性健胃、止泻、 鎮痛、制吐	辛	温補燥中散	脾土	胃、脾、 腎
発汗、健胃、鎮吐	辛	温補燥升散	肺金 脾土	肺、胃、 脾
鎮静、安眠、止汗	甘	涼補潤降収	心火	心
発汗、解毒、消腫、 透疹、治痔疾、升提	辛、甘 微苦	寒泻燥升散	肺金 脾土	肺、胃、 大腸、 脾
発散、排膿、治鼻閉 (通竅)	辛	温泻燥升散	肺金	肺、胃
健胃、消化、止泻、 解表	苦	温平燥平散	脾土	胃、脾

生薬名	基 源	部位	成 分
せっ ころ 石 膏	天然鉱石	含水硫酸カルシウム	生石膏 $\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ 煨石膏 $\text{CaSO}_4$
せん ぎゅう 川 芎	セリ科 センキュウ	根茎	alkaloid ferulic acid 精油
ぜん こ 前 胡	セリ科 ノダケ	根	精油、tannic acid
せん こん 川 骨	スイレン科 コウホネ	根茎	alkaloid (nupharine)
せん たい 蟬 退	セミ科 クマゼミ	脱皮した殻	chitin
そう じゅう 蒼 朮	キク科 ホソバオケラ	根茎	atractylol $\text{C}_{15}\text{H}_{26}\text{O}$ atractylon $\text{C}_{14}\text{H}_{18}\text{O}$
そう ぱく ひ 桑 白 皮	クワ科 クワ	根皮	$\alpha$ -amyrin $\text{C}_{30}\text{H}_{50}\text{O}$ pectinum
そ べく 蘇 木	マメ科 スオウ	茎木	brasilin $\text{C}_{16}\text{H}_{14}\text{O}_5$ 精油
だい おう 大 黄	タデ科 ダイオウ	根茎	アントラキノン誘導体、タンニン配糖体

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
解熱、消炎、止渴、鎮静	辛、甘	寒泻潤降散	肺金 脾土	肺、胃
活血、調経、鎮痛、鎮痙、祛風止痛	辛	温補潤升散	心火	心、胆、肝
鎮咳、祛痰、解熱	苦、辛	寒泻潤降散	肺金	肺
駆瘀血、止血、利水、強壯、健胃	甘	寒補 収	心火	心、胆、脾、肝
解熱、鎮痙、鎮静、透疹	鹹、甘	寒泻平平散	肝木	肺、肝
発散、健胃、利尿、鎮静、祛風湿(外湿)	苦、辛	温泻燥升散	脾土 肝木	胃、脾
祛痰、鎮咳、消炎、利尿	辛、甘	寒泻燥降散	肺金	肺
止血、駆瘀血、鎮痛、鎮静	甘、鹹	平泻平降中	心火	心、脾、肝
泻下、抗菌、収斂、利胆、苦味健胃	苦	寒泻燥降収	肺金 脾土 心火	心、胃、大腸、脾、肝



生薬名	基 源	部位	成 分
だい 大 棗	クロウメモドキ科 ナツメ	果実	tannic acid 鞣酸
たく 沢 泻	オモダカ科 サジオモダカ	根茎	furfural、精油 phytosterol asparagine
ちく 竹 茹	イネ科 ハチク	第二層皮	未 詳
ち 知 母	ユリ科 ハナスゲ	根茎	steroidsaponin nicotinic acid
ちよう 丁 香	フトモモ科 チョウジ	蕾	zugenol $C_{10}H_{12}O_2$ tannic acid oleanolic acid
ちよう 釣 藤	アカネ科 カギカズラ	茎枝	インドール型アルカ ロイド (rhyncophylline)
ちよ 猪 苓	サルノコシカケ科 チョレイマイタケ	菌核	ergosterol 多糖類
ちん 陳 皮	ミカン科 ミカン	成熟果皮	hesperidin $C_{28}H_{34}O_{15}$ myoinositol、精油
てん 天 南 星	サトイモ科 テンナンショウ	根茎	saponin benzoic acid amino acid

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰 経
強壯、緩和、鎮静、 鎮痙	甘	温補潤降収	脾土	脾
利尿、滲湿、清熱、 降圧	甘	寒中燥降散	腎水	膀胱、 腎
解熱、鎮静、鎮吐、 化痰	甘	寒泻潤降平	肺金	肺、胃
解熱、消炎、止渴、 鎮静、血糖降下	苦	寒補潤降散	心火	肺、胃、 腎
芳香性健胃、整腸、 驅風、温中降逆	辛	熱補燥升散	脾土	肺、胃、 脾、腎
鎮静、鎮痙、解熱、 降圧	甘	寒泻平降中	肝木	心、肝
利尿、滲湿、通淋	甘	平平燥中散	腎水	膀胱、 腎
健胃、整腸、祛痰、 止吐、止吃逆	辛、苦	温中燥中散	肺金 脾土	肺、脾
鎮痙、鎮静、祛風、 祛痰、消腫	辛、苦	温泻燥降散	肺金	肺、脾、 肝

生薬名	基 源	部位	成 分
てん ま 天 麻	ラン科 オニノヤガラ	根茎	vanillyl alcohol vanillin
てん りん どう 天 門 冬	ユリ科 クサスギカズラ	根	asparagine $\beta$ -sitosterol
とう か し 冬 瓜 子	ウリ科 トウガン	種子	trigonelline adenine 脂肪油
とう き 当 帰	セリ科 トウキ	根	精油・蔗糖
とう じん 党 参	キキョウ科 ヒカゲツルニンジン	根	澱粉 alkaloid saponin
とう じん 桃 仁	バラ科 モモ	種子	amygdalin $C_{20}H_{27}$ $O_{11}N$ emulsin
と ちゅう 杜 仲	トチュウ科 トチュウ	樹皮	gutta-percha ( $C_5$ $H_8$ ) <sub>n</sub> ゴム質
どっ かつ 独 活	セリ科 シシウド	根	phytosterol 精油
じん じん 人 参	ウコギ科 オタネニンジン	根	ginsenin panacene $C_{15}H_{24}$ panaxin $C_{23}H_{38}O_{10}$

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
鎮座、鎮静、強壮、 祛風、鎮痛	甘	平補燥降散	肝木	肝
清涼、潤燥、止渴、 鎮咳、滋養、強壮	甘、苦	寒補潤降散	肺金	肺、腎
消炎、利尿、瀉下、 排膿、祛痰	甘	寒瀉燥降散	脾土	胃、小 腸、大 腸、脾
補血、調経、活血、 鎮痛	甘、辛	温補潤升散	肝木	心、脾、 肝
強壮、健胃、補血、 祛痰	甘	温補潤升収	脾土	肺、脾
活血、調経、消炎、 解毒、通便	苦、甘	平瀉潤降散	心火	心、肝
降圧、鎮痛、滋養、 強壮	甘	温補中降散	腎水	腎、肝
発汗、鎮痛、麻酔、 祛風湿	辛、苦	温瀉燥升散	腎水	膀胱、 腎
強精、強心、生津、 補脾健胃、降血糖	甘、苦	温補潤升収	脾土	肺、脾

生薬名	基 源	部位	成 分
忍 冬	スイカズラ科 スイカズラ	茎葉	tannic acid 苦味配糖体 (loganin)
貝 母	ユリ科 アミガサユリ	鱗茎	peimine $C_{27}H_{45}O_3N$ peiminine $C_{27}H_{43}O_3N$
麦 芽	イネ科 オオムギ	発芽 乾燥	amylase vitaminB. C
麦 門 冬	ユリ科 ジャノヒゲ	塊根	ブドウ糖、粘液質 $\beta$ -sitosterol
薄 荷	シソ科 ハッカ	葉	menthol $C_{10}H_{20}O$ menthone $C_{10}H_{18}O$
半 夏	サトイモ科 カラスビシャク	根茎	$\beta$ -sitosterol phytosterol saponin
百 合	ユリ科 ササユリ	鱗茎	colchicine 澱粉、蛋白質
白 芷	セリ科 ヨロイグサ	根	angellicin $C_{17}H_{18}O_7$ angelicol $C_{17}H_{16}O_6$
白 朮	キク科 オケラ又 はオオバナオケラ	根茎	atractylol $C_{15}H_{24}O$ atractylone $C_{15}H_{20}O$

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
利尿、解熱、解毒	苦	寒瀉燥降散	心火	膀胱、 心、胃、 脾
鎮咳、祛痰、排膿、 消炎、散結	甘、苦	寒瀉潤降散	肺金	肺、心
健胃、消化、滋養	甘	平補平平散	脾土	胃、脾
滋養、清涼、潤燥、 鎮咳、祛痰	甘	寒補潤降散	肺金	肺、心、 胃
発汗、驅風、鎮痛、 止痒、透疹	辛、苦	涼瀉燥降散	肺金	肺、肝
鎮吐、祛痰、平喘	辛	溫補燥降散	肺金	胃、脾
鎮咳、平喘、強壯、 安神	甘	平補潤降散	肺金	肺、心
鎮痛、麻酔、祛痰、 消腫、排膿	辛	溫瀉燥升散	肺金	肺、胃
健胃、強壯、止瀉、 利尿	甘、苦	溫補燥平収	脾土	胃、脾

生薬名	基 源	部位	成 分
枇 杷 葉	バラ科 ビワ	葉	amygdalin Ursolic acid tannic acid
檳 榔 子	ヤシ科 ピンロウ	種子	arecoline $C_8H_{13}O_2N$ 檳榔紅 tannic acid
茯 苓	サルノコシカケ科 マツホド	菌核	pachymic acid lecithine histidine
附 子	キンボウゲ科 トリカブト	側根	アコニチン ハイゲナミン アルカロイド
附 巳	ツヅラフジ科 シマハスノハカズ ラ (漢防巳)	根	tetrandrine $C_{38}H_{42}O_6N_2$ 精油
木 防 巳	ウマノスズクサ科 アリストロキア・ ファンチ (広防巳)	根	mufangchin
清 風 藤 (日本で言う 防巳)	ツヅラフジ科 オオツヅラフジ	根茎	sinomenine $C_{19}H_{23}O_4N$ disinomenine $C_{38}H_{44}O_8N_2$
芒 硝	天然産芒硝	結晶 精製	硫酸ナトリウム
防 風	セリ科 ボウフウ	根	mannit phenol性物質 精油

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
鎮咳、祛痰、潤肺、 健胃	苦	平瀉潤降散	肺金	肺、胃
瀉下、健胃、駆虫、 利水消腫	辛、苦	温瀉燥降散	肺金	胃、大腸
利尿、鎮静、滋養	甘	平補燥降収	腎水 脾土	肺、心、 胃、脾、 腎
強心、鎮痛、利尿、 回陽救逆、祛風寒湿	辛	熱補燥升散	腎水	心、脾、 腎
利尿、解熱、鎮痛、 消炎、滲湿	苦、辛	寒瀉燥降散	腎水	膀胱、 肺
利尿、解熱、鎮痛、 祛風	苦、辛	寒瀉燥降散	腎水	膀胱、 肺
利尿、鎮痛、消炎、 祛風	辛、苦	温補燥降散	腎水	脾、肝
瀉下 (塩類下剤) 消炎	鹹、苦	寒瀉潤降散	肺金 脾土	胃、大腸
発汗、発散、祛風、 止痒、鎮痛、鎮痙	辛、甘	温瀉燥升散	肺金 脾土	膀胱、 脾、肝

生薬名	基 源	部位	成 分
ぼく せき 樸 櫟	ブナ科 クヌギ	樹皮	tannic acid フラボノイド (quercitrin) 澱粉
ぼ だん び 牡 丹 皮	キンポウゲ科 ボタン	根皮	paeonol $C_9H_{10}O_3$ benzoic acid
ぼ かい 牡 蠣	カキ科 ボレイ	貝殻	炭酸カルシウム リン酸カルシウム
ま おう 麻 黄	マオウ科 マオウ	茎	エフェドリン 精油
ま し じん 麻 子 仁	クワ科 アサ	種子	脂肪油、精油、蛋白 質、lecithin
もく こう 木 香	キク科 モッコウ	根	saussurine inulin 精油
もつ つ 木 通	アケビ科 アケビ	茎	akebin ( $C_{35}H_{56}O_{20}$ ) <sub>3</sub> oleanolic acid
やく も そう 益 母 草	シソ科 メハジキ	葉茎	leonurine stachydrine lauric acid
よく せい じん 薏 苡 仁	イネ科 ハトムギ	種子	脂肪油 coixol $C_8H_7O_3N$ Amino acid

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
収斂	苦	収		
消炎、活血、駆瘀血、 降圧	苦	涼中平平散	心火	心、腎、 肝
鎮静、鎮痛、消腫、 収斂、解熱、止汗	鹹	平補燥降収	肝木 腎水	胆、腎、 肝
発汗、鎮咳、利尿	辛、苦	温泻燥中散	肺金	膀胱、 肺
潤腸、泻下	甘	平平潤降平	脾土	胃、大 腸、脾
芳香性健胃、整腸、 駆風、行気止痛	辛	温補燥中散	脾土	胃、脾
消炎、利尿、催乳	苦	寒泻燥降散	心火	膀胱、 肺、心、 小腸
活血、駆瘀血、止血、 利尿	辛	涼泻燥平散	心火	心、肝
滋養、緩和、利尿、 鎮痙、止泻、排膿	甘	涼中燥降散	脾土	肺、胃、 脾

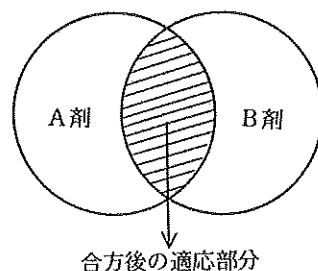
生薬名	基 源	部位	成 分
りゅうがんにく 竜 眼 肉	ムクロジ科 リュウガン	果肉	ビタミンA, B <sub>1</sub> ブドウ糖、蔗糖
りゅうこつ 竜 骨	古代大型脊椎動物	化石 (骨格)	炭酸カルシウム リン酸カルシウム
りゅうたん 竜 胆	リンドウ科 リンドウ	根茎 根	gentisin C <sub>14</sub> H <sub>10</sub> O <sub>5</sub> gentiin C <sub>23</sub> H <sub>28</sub> O <sub>14</sub>
りょうきょう 良 姜	ショウガ科 リョウキョウ	根茎	cineole C <sub>10</sub> H <sub>18</sub> O フラボン類
いりやかく 羚羊 角	ウシ科 サイガ	角	リン酸カルシウム keratin
れんぎょう 蓮 翹	モクセイ科 シナレンギョウ	果実	forsythol C <sub>15</sub> H <sub>18</sub> O <sub>7</sub> oleanolic acid
れんし 蓮 子 (肉)	スイレン科 ハス	種子	raffinose C <sub>16</sub> H <sub>32</sub> O <sub>16</sub> ・5H <sub>2</sub> O カルシウム、リン、 鉄

薬 効	味	薬性・薬向	臓象 (五行)	帰経
滋養、強壮、補血、 鎮静	甘	温補平降収	脾土 心火	心、脾
鎮静、収斂、止血、 消炎	甘、渋	涼補燥降収	肝木 腎水	心、腎、 肝
解熱、消炎、苦味性 健胃、利胆、鎮痙	苦	寒泻燥降収	肝木	膀胱、 胆、肝
散寒、止痛、辛熱性 健胃	辛	熱補燥升散	脾土	胃、脾
解熱、解毒、鎮痙、 鎮静	鹹	寒泻燥降散	肝木	肝
解熱、消炎、利尿、 排膿	苦	寒泻燥降散	心火	心、胆
滋養、強壮、止泻、 鎮静、収斂	甘	平補燥降収	心火	心、腎、 肝

## 薬物の配合法則

漢方エキス剤が、薬価基準に収載されてから十年になろうとしている。年々使用量が増えているのは結構なことであるが、一人の患者に同時に、四剤も五剤も出すのはどうであろうか。合方すれば応用範囲が広くなると考えるのは間違いで、むしろ狭くなることを知る人は意外に少ない。薬味が多くなればなるほど、適応疾患はせばまる。しかしながら、それだけマトをしぼっていることになるので、証があれば効果も大きいということは云える。(但し、適切な合方をした場合のことである。)

いま、A剤とB剤を合方したとすれば、合方方剤は、A剤とB剤の共通症状にしか効かないということである。



合方すればするほど、適応のマトが狭くなり、矢はマトにあたらなくなってしまふ。合方好きは中医学派に多いようである。西洋医学で用いる薬物は、数がふえてもマトが狭くなることはないが、漢方薬物は、そうはいかないのである。言わば、食い合わせがひじょうに大切なのである。

我々は、合方する前に、選んだ方剤の加減方からおこなうこと

が順当である。エキス剤は既製品であり、加減方をしにくいのは致し方ないが、できる限り加減方でとどめておいた方が合方より誤治が少なくてすむ。

加減方をおこなうにしろ、合方をおこなうにしろ、まず薬物の配合法則を知ることが肝要である。

<sup>そうしゆ</sup>相須—同じ性質の薬物の組み合わせによって作用を増強しあうこと。

麻黄と杏仁  
知母と石膏  
知母と黄柏  
陳皮と紫蘇  
麦冬と天冬  
黄芩と黄連  
竜骨と牡蠣  
肉桂と人參  
炙草と人參  
茯苓と白朮  
山藥と白朮  
地黄と丹皮

<sup>そうし</sup>相使—ちがう性質の薬物の組み合わせによって、その中の一つの薬物の薬効がより効果を増すように、他の薬物(使薬)が働くこと。

厚朴は、麻黄、貝母の作用を強める  
川芎は、辛夷、当帰の作用を強める

黄芩は、柴胡、大黃の作用を強める  
竜骨は、黄芩、黄連の作用を強める  
防風は、白朮、蒼朮の作用を強める  
茯苓は、黄芩、人參の作用を強める  
白朮は、甘草、人參の作用を強める  
地黄は、麦冬、天冬の作用を強める  
枸杞は、菊花、花粉の作用を強める

<sup>そうきつ</sup>  
相殺—ある薬物が他の薬物の中毒反応を除去する。相殺は相畏  
の作用が軽い場合と考えてよい。実例は相畏参照。

<sup>そうい</sup>  
相畏—ある薬物と他の薬物が相互に抑制しあって、一方の薬物  
の有害な成分を減少又は抑制すること。効果を相当弱め  
ることによって有害作用が起らないようにしている。

半夏は生姜を畏れる  
当歸は生姜を畏れる  
竜骨は石膏を畏れる  
防風は乾姜を畏れる  
細辛は滑石を畏れる  
黄芩は防風を畏れる  
黄芩は丹皮を畏れる  
阿膠は大黃を畏れる  
貝母は秦艽を畏れる  
茯苓は秦艽を畏れる  
桔梗は竜胆を畏れる  
黄連は牛膝を畏れる

沙参は防已を畏れる

花粉は牛膝を畏れる

辛夷は、石膏、黄芩を畏れる

川芎は、滑石、黄連を畏れる

麻仁は、茯苓、牡蛎を畏れる

巴豆は、大黃、黄連を畏れる

丹皮は、貝母、兎糸、大黃を畏れる

附子は、防風、綠豆、黄芩、人參、犀角、甘草を畏れる

十九畏といわれるものがあり、これは相畏のなかで、副  
作用や毒性ばかりでなく、薬効まで抑制してしまう相惡  
に近い配合禁忌の一種である。

即ち

硫黄は朴硝を畏れ、水銀は砒霜を畏れ、狼毒は密陀僧を畏れ、  
巴豆は牽牛を畏れ、丁香は鬱金を畏れ、牙硝は三棱を畏れ、  
川烏と草烏は犀角を畏れ、人參は五靈脂を畏れ、肉桂は赤石  
脂を畏れる。

<sup>そうお</sup>  
相惡—二種類の薬物がいっしょになることによって、両方とも  
効果がなくなることをいう。

黄芩と生姜、黄芩と杏仁

黄連と生姜、黄連と菊花

黄芩と細辛、黄芩と川芎、黄芩と杏仁、杏仁と葛根

山萸と細辛、山萸と川芎、山萸と桔梗、山萸と防已

花粉と乾姜

牡蛎と麻黄、牡蛎と辛夷、牡蛎と呉萸、呉萸と人參

芒硝と芍薬



貝母と地黃  
細辛と防己  
麻黄と石膏  
厚朴と沢泻

相反——二種類の薬物がいっしょになることによって、はげしい副作用や毒性がでること。相反のなかでとくにひどい十八組があり、これらは十八反といわれて配合禁忌である。

即ち

甘草は大戟、芫花、甘遂、海藻にそむき、

烏頭は貝母、瓜蒌、半夏、白薇、白朮にそむき

藜蘆は人參、丹參、沙參、苦參、玄參、巴參、党參、細辛、芍薬にそむく。

以上述べた相須、相使、相畏、相惡、相殺、相反に単行を加えて七情という。単行とは、一つの薬物単独で、一つの方剤のような効能を発揮することをいい、甘草湯、独参湯などがそれである。七情とは、薬物の配合の七種の異なる作用を指している。(喜、怒、憂、思、悲、恐、驚など七種の精神情意の変化をいう場合の「七情」と混同してはならない。)

方剤中にしばしば用いられる組み合わせを列挙する。特にエキス剤の中に多くみられるものをあげた。

甘草＋石膏→甘石組 表熱証

甘草＋桂枝→甘桂組 表寒証

麻黄＋杏仁→麻杏組 表実証、鎮咳平喘

麻黄＋桂枝→麻桂組 表実証、発汗  
生姜＋大枣→姜枣組 緩和、副作用防止  
生姜＋半夏→姜夏組 半夏の副作用防止  
柴胡＋黄芩→柴芩組 胸脇苦満  
黄芩＋黄連→芩連組 心下痞硬  
梔子＋香豉→梔豉組 裏熱虚証、鎮静  
竜骨＋牡蛎→竜牡組 裏虚証、鎮静、収  
芍薬＋甘草→芍甘組 鎮痛、鎮痙  
甘草＋大黄→甘黄組 裏実証、便秘  
芒硝＋大黄→芒黄組 裏熱実証、便秘  
厚朴＋枳実→厚枳組 裏実証、腹満便秘  
沢泻＋茯苓→沢苓組 裏熱虚証、利湿  
茯苓＋猪苓→二苓組 裏熱虚証、利湿  
白朮＋蒼朮→二朮組 温利湿、祛風  
白朮＋茯苓→朮苓組 裏虚証、利湿  
附子＋白朮→附朮組 裏寒虚証、温利湿  
附子＋乾姜→附乾組 裏寒虚証、温利湿  
生姜＋附子→姜附組 裏寒虚証、温利湿  
甘草＋乾姜→甘乾組 裏寒証、温肢冷  
乾姜＋人參→乾参組 裏寒虚証、温補  
半夏＋人參→半参組 裏虚証、補氣  
甘草＋人參→甘参組 裏虚証、補氣  
乾姜＋半夏＋細辛＋五味子→四熱 寒証  
桂枝＋桃仁→桂桃組 驅瘀血  
丹皮＋桃仁→丹仁組 裏熱実証、驅瘀血  
荊芥＋防風→寒証の皮膚疾患

薄荷+連翹→熱証の皮膚疾患

川芎+当帰→芎帰組 裏虚証、補血

山藥+山萸→両山組 裏虚証、補気強壯

地黄+丹皮→地丹組 裏虚証、理血

麦冬+半夏→冬夏組 潤肺平喘

症状別に効果の大きいペアをあげる。今まで述べた組と一部重複するが、以下のペアを覚えておくと、方剤の構成の理解あるいは、加減方を行う場合に役に立つことが多い。

## 一、消化器症状

### 1、嘔吐

陳皮+生姜 (寒、鬱)

半夏+生姜 (升、鬱)

呉萸+黄連 (升、湿)

生姜+黄連 (熱、湿)

生姜+白朮 (寒、湿)

藿香+陳皮 (寒、鬱)

### 2、下痢

厚朴+陳皮 (鬱)

乾姜+白朮 (湿)

### 3、便秘

大黄+芒硝 (燥熱実)

大黄+枳実 (湿熱実)

大黄+乾姜 (湿寒実)

大黄+麻仁 (燥、実)

杏仁+麻仁 (燥、虚)

芍薬+膠飴 (燥、虚)

## 4、腹痛

香附+良姜 (風)

芍薬+甘草 (虚)

## 5、黄疸

茵陳+梔子 (湿熱)

梔子+枳実 (湿熱)

茵陳+附子 (湿寒)

## 6、痔

升麻+柴胡 (下陷)

升麻+黄芩 (虚)

## 7、消渴(糖尿病)

山藥+黄芩 (寒)

地黄+麦冬 (陰虚)

知母+花粉 (熱)

人參+葛根 (虚)

## 二、呼吸器症状

### 1、喘息

麻黃+杏仁 (実)

五味+細辛 (虚)

## 2、咳嗽

麦冬+半夏 (燥)

蘇子+陳皮 (湿)

厚朴+杏仁 (寒)

## 3、痰

麦冬+天冬 (燥)

陳皮+茯苓 (湿)

## 三、循環器症状

### 1、血熱 (高血圧)

芍藥+丹皮 (血)

芍藥+薄荷 (風)

赭石+生地 (虚)

釣藤+菊花 (風)

杜仲+牛膝 (虚)

### 2、出血

当歸+阿膠 (燥)

艾葉+阿膠 (寒)

黄柏+黄芩 (散)

## 3、瘀血

桂枝+桃仁 (実)

川芎+紅花 (風)

姜黄+桂枝 (虚)

丹皮+桃仁 (熱実)

## 4、貧血

当歸+黄芩 (虚)

当歸+乾姜 (寒)

当歸+地黄 (燥)

## 5、淋巴循環障害 (鬱)

蘇葉+陳皮 (寒)

牡蛎+貝母 (熱虚)

牡蛎+玄參 (熱虚)

貝母+玄參 (燥虚)

桔梗+黄芩 (虚)

## 四、皮膚科症状

連翹+薄荷 (風、熱)

荊芥+防風 (風、寒)

黄柏+梔子 (熱実)

黄芩+桔梗 (虚)

芍藥+地黄 (燥、虚)

五、眼科症状

枸杞+菊花 (風)

決明子+夏枯草 (火)

車前子+菟絲子 (虛)

六、耳鼻科症状

磁石+朱砂 (耳鳴、頭暈)

辛夷+川芎 (鼻閉)

桔梗+甘草 (咽喉)

## 第 3 章

# 証 と 方 剤

## 方剤分類表について

- ①方剤は、現在薬価基準に記載されているエキス剤に限定して解説した。(五十音順に配列)
- ②八綱弁証のところで、○がついているのは、その証が著明であるもの、( )で囲んであるのは、その証がどちらかと云えばそうであるものであまり考慮しなくてもよいものを意味する。
- ③病位のとり方は、第一章で解説した病位対照表を基本としている。方剤を構成する生薬の種類とその配合比率を変えることによって、微妙に適応病位を変化させることができる。また同じく、熱寒、実虚についても、熱証向きを寒証用に、実証向きを虚証用に変化させ得る方剤もあり、本表の分類が絶対性を持つと云うものではない。
- ④臓腑弁証及び治法は、できるだけ公学的立場のものを取り入れた。どの方剤でも、臓象五行の少なくともいずれかひとつには、属するはずであるが、すべての方剤を臓象五行に配属することは、あえておこなわなかった。

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏 寒熱 実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>安中散 (宋時代)</b> (和剂局方) 桂枝 3~5 延胡索 3~4 良姜 0.5~1 牡蠣 3~4 縮砂 1~2 茴香 1.5~2 甘草 1~2	裏寒虚	寒	鬱	太陰病
<b>胃苓湯 (明時代)</b> (万病回春) 乾生姜 1.5~2 大棗 1.5~3 甘草 1~2 厚朴 2.5~3 蒼朮 2.5~3 陳皮 2.5~3 沢瀉 2.5~3 茯苓 2.5~3 猪苓 2.5~3 白朮 2.5~3 桂枝 2~2.5	裏寒虚	湿	痰	太陰病
<b>茵陳蒿湯 (漢時代)</b> (傷寒論) 茵陳蒿 4~6 梔子 2~3 大黃 0.8~2	裏熱実	湿	鬱	陽明病
<b>茵陳五苓散 (漢時代)</b> (金匱要略) 茵陳蒿 3~4 沢瀉 4.5~6 茯苓 3~4.5 猪苓 3~4.5 白朮 3~4.5 桂枝 2~3	裏熱虚	湿	痰	陽明病
<b>温経湯 (漢時代)</b> (金匱要略) 当帰 2~3 川芎 2 芍薬 2 人参 2 麦門冬 3~10 半夏 3~5 桂枝 2 生姜 1~2 呉茱萸 1~3 甘草 2 牡丹皮 2 阿膠 2	裏寒虚	寒	血	厥陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸 胆	胃寒痛 (胃風寒)	温中散寒 止痛 制酸(収斂)	胃アトニー、慢性胃腸炎、胃十二指腸潰瘍、冷飲食による急性胃炎、慢性痔炎
營分	中焦	脾 胃	寒湿困脾	健脾燥湿 利水止瀉	水瀉性下痢、嘔吐、急性消化不良症、急性胃腸炎、胃腸神経症、過敏性大腸症候群
營分	中焦	脾 胆	肝脾湿熱	清熱利湿 瀉下退黄	胆石症、胆のう炎、急性肝炎、急性脾炎、蕁麻疹、ネフローゼ、口内炎
營分	中焦	脾 胃	肝脾湿熱	清熱利湿 退黄	胆石症、胆のう炎、急性肝炎、急性脾炎、蕁麻疹、ネフローゼ、口内炎
血分	下焦	肝 胃	下焦虚寒 血瘀 血虚	温経散寒 活血化瘀 補血調經	月経不順、不正性器出血、不妊症、習慣性流産、自律神経失調症、更年期障害、手掌角化症、凍傷

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>温清飲 (明時代)</b> 万病回春 黄芩1.5~3 黄連1.5~2 黄柏1.5~2 梔子1.5~2 当帰3~4 川芎3~4 芍薬3~4 地黄3~4	裏熱虚	火	血	厥陰病
<b>越婢加朮湯 (漢時代)</b> 金匱要略 麻黄6 石膏8 蒼朮4 乾生姜1 大棗3 甘草2	表熱実	湿	痰	太陽病
<b>黄耆建中湯 (漢時代)</b> 金匱要略 桂枝3~4 芍薬6 生姜3~4 大棗3~4 甘草2~3 膠飴20 黄耆3~4	裏寒虚	燥	氣	太陰病
<b>黄芩湯 (漢時代)</b> 傷寒論 黄芩4 芍薬3 大棗4 甘草3	裏熱虚	火	鬱	陽明病 (傷寒論では太陽少陽合病)
<b>黄連解毒湯 (唐時代)</b> 外台秘要 黄芩3 黄連1.5~2 黄柏1.5~3 梔子2~3	裏熱実	火	痰	陽明病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
血分	下焦	肝 腎	心陰虚 血熱血虚	清熱泻火 補血活血 解毒止血	諸出血(鼻出血、咯血、血尿、不正出血)、皮膚瘙癢症、皮膚炎、手掌角化症、ペーチェット病、黒皮症、神経症
衛分	上焦	膀胱 肺 胃	湿熱犯肺 風水相搏	疏風宣肺 利水	腎炎、ネフローゼ、脚氣、湿疹、蕁麻疹、關節炎、痛風、急性の神経炎、頭痛
營分	中焦	脾 胃	脾胃虚寒	緩急止痛 温中補虚 補氣固表	小建中湯の証にして、虚弱、盗汗、皮膚症状等の著しいもの
氣分	中焦	大腸 胃	大腸湿熱	清熱止痢 和中止痛	急性胃腸炎、細菌性下痢
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	心火旺 血熱妄行 湿熱 胃熱	清心泻火 清熱化湿 解毒止血	諸熱性病、鼻出血、吐血、痔出血、脳充血、高血圧症、表層性胃炎、精神不安、口腔内の炎症、皮膚炎、化膿性炎症

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏 寒熱 実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>黄連湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 黄連3 乾姜1~3 人参2~3 半 夏5~6 大棗3 甘草3 桂枝3	裏(熱)虚	風	鬱	陽明病 (少陽病)
<b>乙字湯 (江戸時代)</b> <small>原南陽</small> 柴胡4~6 黄芩3 升麻1~2 当 歸4~6 甘草2~3 大黃0.5~1.5	裏熱実	火	血	陽明病
<b>葛根湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 葛根4 麻黄3 桂枝2 芍薬2 乾生姜1 大棗3 甘草2	表寒(実)	風	鬱	太陽病
<b>葛根湯加川芎辛夷</b> <small>(日本経験方)</small> 葛根4 麻黄3 桂枝2 芍薬2 大棗3 乾生姜1 甘草2 川芎2 ~3 辛夷2~3	表寒(実)	風	鬱	太陽病
<b>葛根加朮附湯 (江戸時代)</b> <small>吉益東洞、南涯</small> 葛根4 麻黄3 桂枝2 芍薬2 大棗3 生姜3 甘草2 蒼朮3 附子1	表寒(実)	湿	痰	太陽病 (太陰病)

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	脾胃不和	寒熱平調 和胃降逆	急性胃腸炎、胃酸過 多症、二日酔、口内 炎
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸 心包	下陷	升提 清熱化湿 活血	痔核の脱出、脱肛、 痔瘻、痔出血、陰部 湿疹
衛分	上焦	膀胱 肺	肺寒	辛温解表 舒筋	感冒、インフルエン ザ、鼻炎、副鼻腔炎、 頭痛、肩こり、五十 肩、頸肩腕症候群、 後頭神経痛、三叉神 経痛
衛分	上焦	肺	肺寒	辛温解表 排膿解鬱	鼻閉、鼻炎、副鼻腔 炎(蓄膿症)
衛分 (氣分)	上焦	膀胱 肺	湿寒犯肺 寒湿痺	散寒祛湿 辛温解表 止癢	葛根湯の項と同じ “葛根湯の証に湿 と寒が著明なもの”



方剂名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>加味帰脾湯 (宋時代)</b> <b>濟生方</b> 人参 2~3 白朮 2~3 茯苓 2~3 甘草 1 乾生姜 1 大棗 1~2 酸 棗仁 2~3 竜眼 2~3 遠志 1~2 当帰 2 黄耆 2~3 木香 1 柴胡 3 梔子 2	裏熱虚	(火)	血	少陰病
<b>加味逍遙散 (宋時代)</b> <b>和劑局方</b> 柴胡 3 芍薬 3 甘草 1.5~2 白朮 3 茯苓 3 当帰 3 乾姜 1 薄荷 1 牡丹皮 2 梔子 2	裏(熱)虚	風	血	厥陰病
<b>甘草湯 (漢時代)</b> <b>傷寒論</b> 甘草 5~8		風	氣	
<b>甘麦大棗湯 (漢時代)</b> <b>金匱要略</b> 甘草 5 小麦 20 大棗 6	裏(熱)虚	風燥	氣	少陽病
<b>桔梗湯 (漢時代)</b> <b>傷寒論</b> 桔梗 2 甘草 1~3	裏(熱)(実)	風	痰	少陽病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 帰經 (経)	臟腑弁証	治法	適応症
營分	下焦	腎 肝	心脾陰虚 不統血	清熱補陰 益氣摂血 補血安神	消化管出血、不正出 血、紫斑病、仮性白 血病、再生不良性貧 血、パンチ病、不眠 症、神経症、精神不 安、癩れき
血分	下焦	肝 胆	肝陰虚 (肝陽上 亢) 肝脾不和	滋陰平肝 健脾補血 調經	更年期障害、生理不 順、不妊症、湿疹、 面皰、冷えのぼせ、 頭痛、肩こり、生理 痛、腰痛症、不定愁 訴症候群、慢性肝 炎、肝硬変症
		肺		補脾潤肺 解癒止痛 解毒、緩和	急性咽喉痛、口内 炎、胃痙攣、痔の疼 痛、激しい咳き込み、 中毒、アナフィラキ シー
氣分	上焦	心 心包 胆 三焦	臟躁 (心血虚)	養心安神	不眠症、小児夜驚 症、夜啼症、ヒステ リー、てんかん発作
氣分	上焦	心 心包 胆	肺熱	清熱解毒 祛痰排膿	咽喉炎、扁桃腺炎、 嘔声、化膿性疾患 “炎症がつよいとき は甘草を石膏に変 えて桔梗石膏とす る。”

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>帰脾湯 (宋時代)</b> <b>濟生方</b> 人參 2~3 白朮 2~3 茯苓 2~3 甘草 1 乾生薑 1~1.5 大棗 1~2 酸棗仁 2~3 竜眼 2~3 遠志 1 ~2 当歸 2 黄耆 2~3 木香 1	裏寒虚	寒	血	太陰病
<b>芎帰膠艾湯 (漢時代)</b> <b>金匱要略</b> 当歸 4~4.5 川芎 3 芍薬 4~4.5 地黄 5~6 艾葉 3 甘草 3 阿膠 3	裏寒虚	燥	血	厥陰病
<b>芎帰調血飲 (明時代)</b> <b>万病回春</b> 当歸 2 川芎 2 地黄 2 白朮 2 茯苓 2 甘草 1 乾生薑 1~2 大棗 1.5 陳皮 2 香附子 2 烏薬 2 益 母草 1.5 牡丹皮 2	裏寒虚	寒	血	厥陰病
<b>九味檳榔湯 (明治時代)</b> <b>浅田宗伯</b> 檳榔 4 厚朴 3 桂枝 3 紫蘇葉 1.5 陳皮 3 乾生薑 1 甘草 1 木香 1 大黃 1 (呉茱萸 1・茯苓 3 を加 えることもある)	裏寒(虚)	湿	鬱	太陰病
<b>荊芥連翹湯 (現代)</b> <b>一貫堂</b> 柴胡 1.5~2.5 黄芩 1.5 黄連 1.5 黄 柏 1.5 梔子 1.5 当歸 1.5 芍薬 1.5 川芎 1.5 地黄 1.5 薄荷 1.5 連翹 1.5 荊芥 1.5 防風 1.5 白芷 1.5~2.5 桔梗 1.5~2.5 枳殼 1.5 甘草 1~1.5	裏熱(実)	火	血	陽明病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
營分	中焦	脾	心脾兩虚 不統血	氣血双補 益氣攝血 補血安神	消化管出血、不正出 血、紫斑病、仮性白 血病、再生不良性貧 血、パンチ病、不眠 症、神經症、神經衰 弱、癩れき
血分	下焦	肝 脾	血虚 崩漏 出血	補血止血 調經安胎	不正性器出血、月經 過多、切迫流産、産 後出血、紫斑病、痔 出血、消化管出血、 腎膀胱出血
血分	下焦	肝	血虚血瘀	活血化瘀 理氣補血 鎮痛	産後、術後、外傷後 の衰弱、月經不順、 月經困難症、貧血症
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	脾胃氣滯 湿脚氣	理氣降逆 逐水泻下	胃腸炎、自律神經失 調症、脚氣、心臓神 經症、浮腫、関節水 腫
營分	中焦	脾 肝	風熱血瘀	清熱泻火 活血癰表	慢性湿疹、面疱、蓄 膿症、扁桃腺炎、中 耳炎、慢性鼻炎

方剤名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
桂枝湯 (漢時代) 傷寒論 桂枝 3~4 芍薬 3~4 生姜 4 大 棗 3~4 甘草 2	表寒虚	風	氣	太陽病
桂枝加黄耆湯 (漢時代) 金匱要略 桂枝 3~4 芍薬 3~4 生姜 4 大 棗 3~4 甘草 2 黄耆 3~4	表寒虚	風	氣	太陽病
桂枝加葛根湯 (漢時代) 傷寒論 桂枝 3~4 芍薬 3~4 生姜 4 大 棗 3~4 甘草 2 葛根 6	表寒虚	風	鬱	太陽病
桂枝加厚朴杏仁湯 (漢時代) 傷寒論 桂枝 3~4 芍薬 3~4 生姜 3~4 大棗 3~4 甘草 2 厚朴 1~4 杏仁 3~4	表寒虚	寒	痰	太陽病
桂枝加芍薬湯 (漢時代) 傷寒論 桂枝 4 芍薬 6 生姜 4 大棗 4 甘草 2	裏寒虚	風	氣	太陰病
桂枝加芍薬大黄湯 (漢時代) 傷寒論 桂枝 4 芍薬 6 生姜 3~4 大棗 4 甘草 2 大黄 1~2	裏寒実	風	鬱	太陰病

温病論 衛気營 血弁証	三焦	方剤 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
衛分	上焦	膀胱 三	風寒	辛温解肌 祛風散寒	感冒、インフルエン ザ、神経痛
衛分	上焦	膀胱 肺	風寒	辛温解肌 祛風散寒 補氣固表	感冒(盗汗虚弱體質 向き)、インフルエ ンザ、神経痛、湿疹、 (寒冷)蕁麻疹、ア トピー性皮膚炎
衛分	上焦	膀胱 肺 大	風寒	辛温解肌 舒筋	感冒、インフルエン ザ、頭痛、肩こり、 五十肩、頸肩腕症候 群、後頭神経痛、三 叉神経痛
衛分	上焦	肺 脾	寒邪犯肺	辛温解肌 止咳平喘	急性気管支炎、イン フルエンザ
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	胃風寒 (この胃 は下腹部)	緩急止痛	腹痛、しおり腹、慢 性大腸炎、急性虫垂 炎の初期、痙攣性便 秘、過敏性大腸症候 群
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸 脾	胃風寒 (この胃 は下腹部)	緩急止痛 通便	しおり腹、痙攣性便 秘、常習便秘、慢性 盲腸炎、急性虫垂炎 の初期

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>桂枝加朮附湯</b> (江戸時代) <small>(吉益東洞、南涯)</small> 桂枝 4 芍薬 4 生姜 4 大棗 4 甘草 2 蒼朮 4 加工附子 0.5~1	表 寒 虚	湿	氣	太 陽 病
<b>桂枝加竜骨牡蠣湯</b> (漢時代) <small>(金匱要略)</small> 桂枝 3~4 芍薬 3~4 生姜 3~4 大棗 3~4 甘草 2 竜骨 2 牡蠣 3	裏 寒 虚	風	氣	太 陰 病
<b>桂枝人參湯</b> (漢時代) <small>(傷寒論)</small> 桂枝 4 人參 3 白朮 3 乾姜 2 甘草 3	裏 寒 虚	寒	氣	太 陰 病
<b>桂枝茯苓丸</b> (漢時代) <small>(金匱要略)</small> 桂枝 4 芍薬 4 茯苓 4 桃仁 4 牡丹皮 4	裏(寒)(虚)	湿	血	太 陰 病 (陽明病)
<b>桂芍知母湯</b> (漢時代) <small>(金匱要略)</small> 附子 1 芍薬 3 蒼朮 4 生姜 3 麻黄 3 甘草 1.5 桂枝 3 防風 3 知母 3	裏寒(実)	湿	痰	少 陰 病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 婦經 (經)	臟腑弁証	治 法	適 応 症
衛 分	上焦	膀胱	寒湿痺	散寒祛湿 止痛	神経痛、関節リウマチ、四肢のしびれ、“湿邪がさらにひどいときは茯苓を加えて桂枝加苓朮附湯とする”
氣 分	上焦	心包胆 陽	心(腎)陽 虚 散証	補陽安神 収斂	神経性心悸亢進症、神経衰弱、不眠症、多夢、夢精、寝汗せ、小児夜尿症、小児夜驚症
營 分	中焦	脾	脾胃虚寒	温中散寒 健脾益氣 辛温解肌	胃腸炎、口内炎、胃アトニー、心臓神経症、常習性頭痛
氣 分 (營分)	中焦	胃 小腸 三焦 大腸 脾 肝	血瘀	活血化瘀	生理不順、子宮筋腫、子宮付属器炎、打撲症、痔核、皮膚炎、静脈瘤、頭痛、腰痛、変形性関節症、“湿邪、火邪、風邪が加われば薏苡仁を加えて桂枝茯苓丸加薏苡仁とする”
營 分	下焦	腎 胃	寒湿痺	散寒祛湿 止痛	多発性関節炎、変形性膝関節症、慢性関節リウマチ、五十肩

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>啓脾湯 (明時代)</b> 万病回春 人參3 白朮4 茯苓4 甘草1 生姜3 大棗1 陳皮2 沢瀉2 山楂2 蓮肉3 山藥3	裏寒虚	湿	痰	太陰病
<b>桂麻各半湯 (漢時代)</b> 傷寒論 麻黄2 杏仁2~2.5 甘草2 桂枝 3~3.5 芍薬2 生姜2 大棗2	表寒(実)	風	氣	太陽病
<b>香蘇散 (宋時代)</b> 和劑局方 香附子3.5~6 紫蘇葉1~2 陳皮2 ~3 乾生姜1~2 甘草1~1.5	表寒虚	風	痰	太陽病
<b>五虎湯 (明時代)</b> 万病回春 麻黄4 杏仁4 石膏10 甘草2 桑白皮2~3	表熱実	風	痰	太陽病
<b>五積散 (宋時代)</b> 和劑局方 桂枝1~2 芍薬1~2 乾生姜・乾 姜合わせて1~2 大棗1~2 甘草 1~2 麻黄1~2 白朮1~2 当 帰1.5~2 川芎1~2 桔梗1~2 陳皮2 半夏2 茯苓2 白朮・蒼 朮合わせて3~4 厚朴1~2 枳実 1~2	裏寒虚	風	鬱	厥陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 帰經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
營分	中焦	脾	脾胃氣虚	補氣健脾 理氣化湿 止瀉	消化不良症、慢性大腸炎(水瀉性下痢)、常習下痢による瘰癧、低蛋白血症、ネフローゼ
衛分	上焦	膀胱肺 經	風寒	辛温解表 祛風散寒	感冒、関節痛筋肉痛(一時的なもの)、(寒冷)蕁麻疹、皮膚掻痒症、湿疹の初期(急性期)
衛分	上焦	膀胱肺 小	風寒氣滯	理氣解表	感冒(胃弱、神経質者向き)、感冒性胃腸障害、蕁麻疹(魚や蟹の中毒)
衛分	上焦	肺 胃	肺熱実	辛涼透泄 清肺平喘	急性気管支炎、気管支肺炎(麻杏甘石湯の証にして、咽痛、咳嗽のつよいとき)
血分	下焦	肝 心	寒湿困脾 氣、血、 痰、鬱 (食)、寒 の五滯	發表温裏 行氣和血 燥湿除痰 活血調經	慢性胃腸カタル、腰痛、白帶下、生理痛、脚氣、半身不隨、関節リウマチ、腰痛、坐骨神経痛

方剤名と組成	八綱弁証 (表裏) (熱寒) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>牛車腎気丸 (宋時代)</b> <small>濟生方</small> 熟地黄 5~6 山茱萸 3 山茱萸 3 茯苓 3 沢瀉 3 牡丹皮 3 桂枝 1 加工附子 0.5~1 牛膝 2~3 車前子 2~3	裏(寒)虚	湿	氣	少陰病
<b>呉茱萸湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 呉茱萸 3~4 人参 2~3 生姜 4~6 大棗 3~4	裏寒虚	湿	痰	少陰病
<b>五淋散 (宋時代)</b> <small>和劑局方</small> 黄芩 3 梔子 2 芍薬 2 甘草 3 茯苓 5~6 当帰 3 (地黄 3・沢瀉 3・木通 3・滑石 3・車前子 3 を加えることもある)	裏熱虚	湿	血	少陰病
<b>五苓散 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 沢瀉 5~6 茯苓 3~4.5 猪苓 3~4.5 白朮 3~4.5 桂枝 2~3	裏(熱)虚	湿	痰	少陰病
<b>柴陷湯 (日本経験方)</b> 柴胡 5~7 黄芩 3 半夏 5 生姜 3~4 大棗 3 人参 2~3 甘草 1.5~2 黄連 1.5 瓜呂仁 3	裏熱虚	火	痰	少陽病

温病論 衛気營 血弁証	三焦	方剤 帰經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
營分	下焦	腎	腎陽虚 水泛(腫)	温補腎陽 利水	慢性腎炎、前立腺肥大症、高血圧症、腰痛、坐骨神経痛、変形性膝関節症
營分	下焦	腎 ハ	胃虚寒 胃氣上逆	温胃降逆 健脾益氣	嘔吐症、慢性大腸炎、胃アトニー、下肢の冷え、常習性頭痛、片頭痛
營分	下焦	腎	膀胱湿熱 石淋、氣淋、膏淋、勞淋、血淋(熱淋)の五淋	清熱利湿 活血止痛	尿道炎、膀胱炎、腎盂腎炎、尿路結石
營分	下焦	腎 ハ	水湿 (蓄水)	利水滲湿 (通陽利水)	ネフローゼ症候群、腎炎、クインケの浮腫、陰囊水腫、嘔吐症、二日酔い、急性胃腸炎、常習性下痢症、頭痛、三叉神経痛
氣分	上焦	心 心包 胆	肺熱(熱痰) 肝鬱	清熱化痰 疏肝解鬱	気管支炎、胸膜炎、肺炎、咽喉炎、咳嗽による胸痛

方剤名と組成	八綱弁証 (表裏 熱寒 実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>柴胡加竜骨牡蠣湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 柴胡 4~5 黄芩 2.5 半夏 4 生姜 2~3 大棗 2~2.5 人參 2~2.5 桂枝 2~3 茯苓 2~3 竜骨 2~2.5 牡蠣 2~2.5 (大黃 1 を加えることもある)	裏熱虚	風	氣	少陽病
<b>柴胡桂枝湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 柴胡 5 黄芩 2 半夏 4 乾生姜 1 大棗 2 人參 2 甘草 1.5~2 桂枝 2 芍薬 2~3	裏熱虚 (半表半裏)	風	氣	少陽病 (太陽少陽合病)
<b>柴胡桂枝乾姜湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 柴胡 5~6 黄芩 3 桂枝 3 瓜呂根 3~4 乾姜 2 牡蠣 3 甘草 2	裏(熱)虚	風	氣	少陰病
<b>柴胡清肝湯 (現代)</b> <small>一貫堂</small> 柴胡 2 黄芩 1.5 黄連 1.5 黄柏 1.5 梔子 1.5 当帰 1.5 芍薬 1.5 川芎 1.5 地黄 1.5 薄荷 1.5 連翹 1.5 桔梗 1.5 牛蒡子 1.5 瓜呂根 1.5 甘草 1.5	裏熱虚	火	血	厥陰病

温病論 衛気營 血弁証	三焦	方剤 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
氣分	上焦	心 心包 (胆)	心肝火旺 散証	清熱安神 収斂	高血圧症、動脈硬化症、神経症、心臓神経症、甲状腺機能亢進症、軽度の不整脈と頻脈、てんかん、小児夜啼症、不眠症、遺精、円形脱毛症
氣分	上焦	心 心包 (胆)	肝鬱化火 脾氣虚	和解半表半裏 疏肝解鬱 和胃止痛	感冒、インフルエンザ、神経性胃炎、ストレス潰瘍、胆嚢炎、胆石症、頭痛、三叉神経痛、肋間神経痛、腰痛
營分	下焦	(腎)	肝鬱化火 津虚	疏肝解鬱 生津潤燥 安神	神経症、胃腸神経症、不眠症、更年期障害、肝機能障害、慢性気管支炎、自律神経失調症、神経性心悸亢進症
血分	下焦	(肝)	血熱血虚	清熱汚火 理血排膿	頸部リンパ腺腫、瘰癧れき、肺門リンパ腺腫、慢性扁桃腺炎、アデノイド、胸膜炎、小児腺病体質の改善、慢性湿疹

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>柴朴湯</b> (日本經驗方) 柴胡 4~7 黄芩 3 半夏 5~6 生 姜 3~4 大棗 2~3 人參 2~3 甘草 2 厚朴 3 茯苓 5 紫蘇葉 2	裏(熱)虚	風	痰	少陽病
<b>柴苓湯</b> (元時代) (世医得効方) 柴胡 4~7 黄芩 3 半夏 4~5 生 姜 4 大棗 2~3 人參 2~3 甘草 2 沢瀉 5~6 茯苓 3~4.5 猪苓 3 ~4.5 白朮 3~4.5 桂枝 2~3	裏熱虚	湿	痰	少陰病
<b>三黄泻心湯</b> (漢時代) (金匱要略) 黄芩 1~1.5 黄连 1~1.5 大黄 1~2	裏熱実	火	痰	陽明病
<b>酸棗仁湯</b> (漢時代) (金匱要略) 酸棗仁 7~15 知母 3 川芎 3 茯苓 5 甘草 1	裏熱虚	風	血	少陽病
<b>三物黄芩湯</b> (漢時代) (金匱要略) 黄芩 3 苦參 3 地黄 6	裏熱虚	火	血	少陽病
<b>滋陰降下湯</b> (明時代) (万病回春) 当帰 2.5 芍薬 2.5 地黄 2.5 麦門冬 2.5 天門冬 2.5 陳皮 2.5 知母 1.5 黄柏 1.5 白朮 3 甘草 1.5	裏熱虚	火	血	少陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 帰經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
氣分	上焦	心包 (胆)	肺氣逆 肝鬱	理氣降逆 疏肝解鬱	気管支喘息、慢性気 管支炎、不安神経症
營分	下焦	腎 胃	肝鬱化火 水湿	疏肝解鬱 清熱利湿	肝炎、肝硬変で浮 腫、腹水を伴うもの。 腎炎、ネフローゼ、 急性胃腸炎
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	心火旺 血熱妄行 湿熱 胃熱	清心泻火 清熱化湿 解毒止血	黄連解毒湯に準じ る。(便秘があれば 三黄泻心湯、なけれ ば黄連解毒湯を用 いる)
氣分	上焦	心包 胆	心陰虚	滋陰安神	不眠症、不安神経 症、心臓神経症
氣分	上焦	心包 胆	心陰虚 血熱 (四肢煩 熱)	滋陰清熱	四肢のほてり、産褥 熱、口内炎、不眠症
營分	下焦	腎 小腸	肺腎陰虚	滋補肺腎 滋陰降火	慢性気管支炎、気管 支拡張症、肺結核



方剤名と組成	八綱弁証 (表裏 寒熱 実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>滋陰至宝湯</b> (明時代) 万病回春 柴胡 1~3 知母 2~3 地骨皮 2~3 薄荷 1 香附子 2~3 芍薬 2~3 麦門冬 2~3 貝母 1~2 陳皮 2~3 当帰 2~3 白朮 2~3 茯苓 2~3 甘草 1	裏熱虚	燥	痰	少陰病
<b>四逆散</b> (漢時代) 傷寒論 柴胡 2~5 芍薬 2~4 枳実 2 甘草 1~2	裏熱(虚)	風	鬱	陽明病
<b>四君子湯</b> (宋時代) 和劑局方 人参 4 白朮 4 茯苓 4 甘草 1~2 生姜 3~4 大棗 1~2	裏寒虚	湿	痰	太陰病
<b>梔子柏皮湯</b> (漢時代) 傷寒論 梔子 3 黄柏 2 甘草 1	裏熱(実)	火	痰	陽明病
<b>七物降下湯</b> (現代) 大塚敬節 当帰 3~4 川芎 3~4 芍薬 3~4 地黄 3~4 釣藤 3~4 黄耆 2~3 黄柏 2	裏(寒)虚	湿	血	厥陰病
<b>四物湯</b> (宋時代) 和劑局方 当帰 3~4 川芎 3~4 芍薬 3~4 地黄 3~4	裏寒虚	燥	血	厥陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方劑 婦經 (經)	臟腑弁証	治 法	適 応 症
營 分	下焦	腎	肺陰虚 肝氣鬱結	滋陰潤肺 清熱化痰 疏肝解鬱	慢性気管支炎、気管支拡張症、肺結核、ヒステリー球
氣 分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	肝氣鬱結 肝脾不和	疏肝解鬱 理氣止痛	胃炎、胃潰瘍、胆囊炎、胆石症、大腸炎、肋間神経痛
營 分	中焦	脾	脾胃氣虚	補氣健脾 理氣化痰	消化不良症、慢性胃腸炎、胃アトニー、慢性的の下痢症、常習下痢による瘰癧
營 分	中焦	脾	肝胆湿熱	清熱利湿	皮膚搔痒症(特に黄疸後)、慢性湿疹、蕁麻疹
血 分	下焦	肝	肝陰虚 (肝陽上亢)	滋陰平肝	高血圧症、眼底出血、自律神経失調症、更年期障害、高血圧に伴う諸症状(のぼせ、肩こり、耳鳴、頭重)
血 分	下焦	肝	心肝血虚	補血活血 調經	月経不順、子宮發育不全、産後の障害、冷え症、凍傷、指掌角化症、貧血症、更年期障害、子宮脱

方剤名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>炙甘草湯 (漢時代)</b> 傷寒論 甘草(炙) 3~4 桂枝 3 生姜 1~3 大棗 3~5 麥門冬 6 麻子仁 3 地黄 4~6 人參 2~3 阿膠 2	裏(熱)虚	燥	血	厥陰病
<b>芍薬甘草湯 (漢時代)</b> 傷寒論 芍薬 3~6 甘草 3~6		風	氣	
<b>芍薬甘草附子湯 (漢時代)</b> 傷寒論 芍薬 3 甘草 3 附子 1	(裏)寒(虚)	風寒	氣	
<b>十全大補湯 (宋時代)</b> 和劑局方 当帰 3 川芎 3 芍薬 3 地黄 3 人參 2.5~3 白朮 3 茯苓 3 甘草 1.5 桂枝 3 黄耆 2.5~3	裏寒虚	寒	血	厥陰病
<b>十味敗毒湯 (江戸時代)</b> 華岡青州 前芥 1~1.5 防風 1.5~3 独活 1.5~3 檳榔 2~3 桔梗 2~3 川芎 2~3 生姜 1~3 茯苓 2~4 柴胡 2~3 甘草 1~1.5	裏(寒)(実)	風	痰	少陰病
<b>潤腸湯 (明時代)</b> 万病回春 大黃 1~3 枳実 0.5~2 厚朴 2 麻子仁 2 杏仁 2 桃仁 2 当帰 3 地黄 6 (内 3 は熟地黄) 黄芩 2 甘草 1~1.5	裏(熱)虚	燥	鬱	陽明病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方劑 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
血分	下焦	肝	心気陰兩虚	益気滋陰 補血復脈	神経性心悸亢進症、不整脈、甲状腺機能亢進症、冠不全、貧血症で多汗口渴療瘦の者
気分			諸風(痛)	解痙止痛	急性の神経痛、筋肉の急迫性攣急。腎石、胆石などの痙痛発作。こむらがえり
気分			諸風寒	解痙止痛 散寒	上記に準じる
血分	下焦	肝	気血兩虚 脾虚寒	気血双補 温陽祛寒	貧血症、産後術後の衰弱、白血病、カリエス、瘰癧、慢性の消化管出血
営分	下焦	腎	風湿(皮疹)	祛風化湿 解毒	湿疹、蕁麻疹、皮膚炎、癰、癤、乳腺炎、淋巴腺炎、麦粒腫
営分	中焦	脾	脾陰虚燥 結	潤腸通便 滋陰補血	常習性便秘(老人、産後、貧血症の便秘に向く)

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>小建中湯</b> (漢時代) <small>傷寒論</small> 桂枝3~4 芍薬6 生姜3~4 大 棗3~4 甘草2~3 膠飴20	裏寒虚	燥	氣	太陰病
<b>小柴胡湯</b> (漢時代) <small>傷寒論</small> 柴胡4~7 黄芩3 半夏4~5 生 姜4 大棗2~3 人参2~3 甘草 2	裏熱虚 (半表半裏)	風	氣	少陽病
<b>小柴胡湯加桔梗石膏</b> <small>(日本経験方)</small> 柴胡4~7 黄芩3 半夏4~7 生 姜4 大棗2~3 人参2~3 甘草 2 桔梗3 石膏10	裏熱虚	火	氣	少陽病
<b>小青竜湯</b> (漢時代) <small>傷寒論</small> 麻黄2~3 桂枝2~3 甘草2~3 芍薬2~3 半夏3~6 乾姜2 ~3 細辛2~3 五味子1.5~3	表寒実	湿	痰	太陽病
<b>小半夏加茯苓湯</b> (漢時代) <small>金匱要略</small> 半夏5~8 生姜5~8 茯苓3~5	裏寒虚	湿	痰	太陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	脾胃虚寒	緩急止痛 温中補虚	小兒夜尿症、虚弱児 体質改善、小兒夜驚 症、慢性大腸炎、痙 攣性便秘、過敏性大 腸症候群、胃十二指 腸潰瘍
氣分	上焦	心 心包 胆	肝鬱化火 (往来寒熱) (胸脇苦満)	疏肝解鬱 清熱透表 (和解少陽)	諸種の熱性病、気管 支炎、咽喉炎、中耳 炎、耳下腺炎、胸膜 炎等。肺炎、肺結核 などの補助療法。リ ンパ腺炎、肝炎、肝 機能障害、胃炎、神 経症
氣分	上焦	心 心包 胆	肝鬱化火	疏肝解鬱 清熱透表	小柴胡湯証にして 上気道に熱証所見 が著明なとき。咽喉 炎、扁桃腺炎、中耳 炎、耳下腺炎
衛分	上焦	膀胱 肺	風寒客表 水飲内停	解表化飲 止咳平喘 温肺化痰	気管支炎、気管支喘 息の発作期、急性鼻 炎、アレルギー性鼻 炎、突発性浮腫、急 性腎炎の初期
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	痰飲 胃氣上逆	化痰利水 和胃降逆	急性胃炎、妊娠嘔 吐、嘔気、神経性嘔 吐

方剤名と組成	八綱弁証 (表裏 寒熱 実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>消風散 (明時代)</b> <b>(外科正宗)</b> 荆芥1 防風2 牛蒡子2 蒼朮2~3 蟬退1 苦參1 知母1.5 木通2 ~5 當歸3 地黃3 石膏3~5 胡麻1.5 甘草1~1.5	表熱虚	風	血	太陽病
<b>升麻葛根湯 (明時代)</b> <b>(万病回春)</b> 葛根5~6 升麻1~3 芍薬3 生 姜1~3 甘草1.5~3	表熱虚	風	鬱	太陽病
<b>四苓湯 (明時代)</b> <b>(温疫論)</b> 沢瀉4 茯苓4 猪苓4 白朮4	裏熱虚	湿	痰	少陰病
<b>辛夷清肺湯 (明時代)</b> <b>(外科正宗)</b> 辛夷2~3 枇杷葉1~3 麥門冬5 ~6 知母3 百合3 升麻1~1.5 石膏5~6 黄芩3 梔子1.5~3	表熱虚	火	痰	太陽病
<b>参蘇飲 (宋時代)</b> <b>(和劑局方)</b> 人參1.5 茯苓3 甘草1 半夏3 陳 皮2 生姜1.5 大棗1.5 紫蘇葉1 ~1.5 葛根2 前胡2 桔梗2 木 香1~1.5 枳實1~1.5	表寒虚	風	鬱	太陽病
<b>神秘湯 (唐時代)</b> <b>(外台秘要)</b> 麻黄3~5 杏仁4 甘草2 厚朴3 紫蘇葉1.5~3 陳皮2.5~3 柴胡 2~4	表寒実	湿	痰	太陽病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方劑 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
衛分	上焦	膀胱	風湿熱 (皮疹)	祛風化湿 清熱理血	湿疹、蕁麻疹、皮膚 瘙癢症、アトピー性 皮膚炎、汗疱、白癬 症、アレルギー性皮 膚炎、小児ストロフ ルス
衛分	上焦	膀胱 肺	風熱 痘疹未発	辛涼透疹	感冒の初期、扁桃腺 炎。麻疹、風疹の初 期。皮膚炎
營分	下焦	腎	水湿	利水滲湿	五苓散の証で、頭 痛、めまいなどの表 証のないもの
衛分	上焦	肺	肺熱	清熱化痰 通竅	慢性副鼻腔炎、慢性 鼻炎、肥厚性鼻炎、 慢性咽喉炎
衛分	上焦	肺	風寒(肺) 痰飲(脾)	益氣解表 化痰止咳 理氣和胃	胃アトニー者の感 冒、気管支炎、慢性 気管支炎、気管支喘 息の体質改善
衛分	上焦	肺	肺寒 肝氣鬱結	止咳平喘 疏肝解鬱 理氣化痰	気管支炎、慢性気管 支炎、気管支喘息、 肺氣腫

方剤名と組成	八綱弁証 (表裏、寒熱、実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
真武湯 (漢時代) 傷寒論 加工附子0.5 芍薬3 白朮3 茯苓4 乾生姜1.5	裏寒虚	湿	痰	少陰病
清上防風湯 (明時代) 万病回春 黄芩2~3 黄連1~1.5 梔子1.5~3 薄荷1~1.5 連翹2~3 前芥1~1.5 防風2~3 白芷2~3 桔梗2~3 川芎2~3 枳実1~1.5 甘草1~1.5	表熱(実)	風	鬱	太陽病
清暑益気湯 (明時代) 医学六要 人參3~3.5 白朮3~3.5 甘草1~2 当帰3 黄耆3 陳皮2~3 麦門冬3~3.5 五味子1~2 黄柏1~2	裏熱虚	暑	氣	陽明病
清心蓮子飲 (宋時代) 和剂局方 人參3 茯苓4 甘草1.5~2 蓮肉4 黄芩3 黄耆2 麦門冬4 地骨皮2 車前子3	裏熱虚	湿	痰	少陰病
清肺湯 (明時代) 万病回春 麦門冬3 天門冬2 貝母2 桑白皮2 桔梗2 陳皮2 杏仁2 五味子0.5~2 竹茹2 黄芩2 梔子2 茯苓3 当帰3 生姜0.5~2 大棗2 甘草1~1.5	裏熱虚	火	痰	厥陰病

温病論 衛気營血弁証	三焦	方剤 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
營分	下焦	腎	脾腎陽虚 水泛	温陽利水	ネフローゼ症候群、慢性腎炎、浮腫、慢性大腸炎、内臓下垂症、心不全、慢性関節リウマチ、知覚神経麻痺
衛分	上焦	膀胱	上焦風熱	祛風發表 清熱解毒	面皰、尋常性毛瘡、癩、皮膚炎、感冒、頭痛
營分	中焦	脾	氣津兩傷	益氣生津	日射病、熱射病。暑さによる食欲不振、全身倦怠。
營分	下焦	腎	心火旺 氣陰兩虚	清心泻火 益氣滋陰	不眠症、更年期障害、神経症、慢性尿道炎、慢性腎炎、膀胱炎、口内炎
血分	下焦	肝	肺陰虚	滋陰清肺 止咳祛痰	慢性気管支炎、気管支拡張症、肺結核

方剤名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>川芎茶調散</b> (宋時代) (和剤局方) 川芎3 荆芥2 防風2 薄荷2 香附子4 白芷2 羌活2 細茶1.5 甘草1.5	表(寒)(実)	風	氣	太陽病
<b>疎経活血湯</b> (明時代) (万病回春) 当歸2 川芎2 芍薬2.5 地黄2 白朮2 茯苓2 甘草1 防風1.5 羌活1.5 牛膝1.5 威靈仙1.5 白芷 1~1.5 防己1.5 桃仁2 竜胆1.5 生姜1~1.5 陳皮1.5	裏寒虚	風	血	厥陰病
<b>大黃甘草湯</b> (漢時代) (金匱要略) 大黃4 甘草1~2	裏熱実	火	鬱	陽明病
<b>大黃牡丹皮湯</b> (漢時代) (金匱要略) 大黃1~2 芒硝4 牡丹皮4 桃仁 4 冬瓜子4~6	裏熱実	火	血	陽明病
<b>大建中湯</b> (漢時代) (金匱要略) 蜀椒1~2 乾姜3~5 人參2~3 膠飴20	裏寒虚	寒	鬱	太陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方劑 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
衛分	上焦	膀胱	風寒頭痛	疏風散寒 活血鎮痛 止頭痛	感冒、流感、鼻炎、 偏頭痛、血管痙攣性 頭痛
血分	下焦	肝	風濕痺血 虚(行痺)	祛風湿 補血 活血化瘀	慢性関節リウマチ、 変形性膝関節症、腰痛、 坐骨神経痛、半身不随、 血栓性血管炎
氣分	中焦	大腸	秘結	通便	便秘
營分	中焦	脾	太陽実熱 燥結	清熱瀉下 活血消癥	急性虫垂炎の初期、 痔核、痔瘻、子宮附 属器炎、骨盤内炎 症、腹膜炎の初期。 尿路結石で便秘、炎 症を伴うもの
營分	中焦	脾	脾胃虚寒 疝痛	温中散寒 解痙止痛 補氣健脾	腸疝痛、腎石発作、 イレウス、腸管蠕動 不安、慢性大腸炎、 慢性腹膜炎(腸管癒着)

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>大柴胡湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 柴胡6 黄芩3 半夏3~4 生姜4 ~5 大棗3 枳実2 芍薬3 大黃 1~2	裏熱実	風	鬱	少陽病 (少陽陽明合病)
<b>大承氣湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 大黃2 芒硝3 枳実3 厚朴5	裏熱実	火	鬱	陽明病
<b>大防風湯 (宋時代)</b> <small>和劑局方</small> 当帰3 川芎2 芍薬3 地黄3 人參1.5 白朮3 甘草1.5 生姜1.5 大棗1.5 黄耆3 防風3 羌活1.5 牛膝1.5 杜仲3 附子1	裏寒虚	風	血	厥陰病
<b>竹茹温胆湯 (明時代)</b> <small>万病回春</small> 半夏3~5 生姜3 茯苓3 陳皮2 ~3 甘草1 竹茹3 枳実1~2 柴 胡3~5 麦門冬3~4 桔梗2~3 香附子2 人參1~2 黄連1~2	裏熱虚	風	痰	少陰病
<b>治打撲一方 (江戸時代)</b> <small>香川修庵</small> 桂枝3 甘草1.5 川芎3 丁香1 ~1.5 川芎3 桃椒3 大黃1~1.5	裏(寒)(実)	風	血	(太陰病)

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
氣分	上焦 中焦	心 心包 胆 胃 小腸 三焦 大腸	肝鬱化火 (往来寒熱 胸脇苦滿)	疏肝解鬱 清熱瀉下 (外解少陽)	高血圧症、肝炎、胆 石、胆嚢炎、喘息、 慢性湿疹、肥胖症、 肩こり、肋間神経 痛、痛風、腰痛
營分	中焦	脾	熱結	峻瀉清熱	習慣性便秘、急性便 秘、イレウスの初期
血分	下焦	肝	氣血兩虚 風寒湿痺 (行痺) 鶴膝風	祛風湿、散 寒、補氣、 補血、活血 止痛	慢性関節リウマチ、 強直性膝関節炎、半 身不随、神経麻痺
營分	下焦	腎	痰熱上擾 肝氣鬱結	清熱化痰 和胃降逆 滋陰益氣	不眠症、神経症、自 律神経失調症、更年 期障害、心臓神経 症、胃アトニー者の 慢性気管支炎、慢性 咽喉炎、カゼのこじ れ
氣分	上焦	心 心包 胆	血瘀	活血化痰 消腫 通陽	打撲、捻挫、外傷に よる腫張、疼痛

方剤名と組成	八綱弁証 (表裏) (熱寒) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
治頭痛一方 (日本経験方) 前芥1 防風2 連翹3 蒼朮3 忍大 冬2 川芎3 紅花1 甘草1 黄0.5 (入れぬこともある)	表(寒)実	風	血	太陽病
調胃承気湯 (漢時代) 傷寒論 大黄2~2.5 芒硝1 甘草1	裏熱実	火	鬱	陽明病
釣藤散 (金時代) 本事方 釣藤3 菊花2 防風2 甘草1 人參2 石膏5~7 半夏3 乾生薑 1 茯苓3 陳皮3 麦門冬3	裏熱虚	風	痰	陽明病
腸癰湯 (唐時代) 千金方 薏苡仁9 牡丹皮4 桃仁5 冬瓜 子6	裏熱実	火	血	陽明病
猪苓湯 (漢時代) 傷寒論 沢瀉3 茯苓3 猪苓3 滑石3 阿膠3	裏熱虚	湿	血	少陰病
猪苓湯合四物湯 (日本経験方) 沢瀉3 茯苓3 猪苓3 滑石3 阿膠3 当帰3~4 川芎3~4 芍 薬3~4 地黄3~4	裏熱虚	湿	血	厥陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方劑 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
衛分	上焦	膀胱	風湿(皮疹)	祛風化湿 活血解毒	湿疹、皮膚炎、アト ピー性皮膚炎、乳幼 児の湿疹、くさ、糜 爛、痂皮
營分	中焦	脾	秘結	緩瀉清熱	便秘
營分	中焦	脾	肝陰虚 肝陽化風	滋陰平肝 熄風明目	高血圧症、脳血管障 害、脳動脈硬化症、 不眠症、更年期障 害、耳鳴、眩暈、頭 痛、肩こり、白内障
營分	中焦	脾	腸癰	清熱排膿 活血消癰	大黃牡丹皮湯に準 じる(便秘傾向がな い、又は大黃牡丹皮 湯を用いて急性症 状が消失したが、慢 性化して体力もやや 衰えた場合)
營分	下焦	腎	膀胱湿熱 水熱互結	滋陰利水 清熱止血	膀胱炎、尿道炎、腎 盂腎炎、腎臓結石、 膀胱結石、排尿痛、 淋疾、膀胱カタル、 特発性血尿
血分	下焦	肝	膀胱湿熱 水熱互結 血虚	滋陰利水 清熱止血 補血	猪苓湯に準じる(排 尿痛、頻尿、血尿、 貧血等がつよい傾向 にある)



方剤名と組成	八綱弁証 (表裏) (熱寒) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>通導散 (明時代)</b> <small>(万病回春)</small> 大黃3 芒硝3~4 枳実2~3 厚朴2 甘草2 当帰3 紅花2 蘇木2 木通2 陳皮2	裏熱実	火	血	陽明病
<b>桃核承気湯 (漢時代)</b> <small>(傷寒論)</small> 大黃1~3 芒硝1~2 甘草1.5 桃仁5 桂枝4	裏熱実	火	血	陽明病
<b>当帰飲子 (宋時代)</b> <small>(濟生方)</small> 当帰5 川芎3 芍薬3 地黄4 前芥1.5 防風3 茯苓3 黄耆1.5 何首烏2 甘草1	裏寒虚	風	血	厥陰病
<b>当帰建中湯 (漢時代)</b> <small>(金匱要略)</small> 桂枝4 芍薬5~6 生姜4 大棗4 甘草2 当帰4 (膠胎20を加えることもある)	裏寒虚	燥	血	少陰病
<b>当帰四逆加呉茱萸生姜湯 (漢時代)</b> <small>(傷寒論)</small> 桂枝3 芍薬3 生姜4 大棗5 甘草2 当帰3 細辛2 木通3 呉茱萸2~2	裏寒虚	寒	血	厥陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方劑 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
營分	中焦	脾	氣滯血瘀	理氣活血 破血逐瘀	桃核承気湯に準じる。補血、活血、止血がそなわる。
營分	中焦	脾	血瘀蓄血	清熱泻下 活血逐瘀	月経困難、月経不順、骨盤内炎症、子宮付属器炎、子宮筋腫、痔核痔瘻、下腿静脈瘤、腹膜炎の初期、慢性盲腸炎、更年期障害、打撲によるうっ血、のぼせによる鼻出血。
血分	下焦	肝	血虚生風	補血潤燥 止痒	老人性湿疹、皮膚癢痒症、皸糠疹
營分	下焦	腎	脾胃虚寒 血虚	緩急止痛 温中補虚 補血調經	小建中湯の証にして、貧血、月経困難、月経痛等の著しいもの。
血分	下焦	肝	血虚寒痛	温經散寒 養血通脈 鎮痛鎮痙	凍傷、子宮脱、生理痛、白帯下、頭痛、腰痛、坐骨神経痛、慢性関節炎、慢性関節リウマチ、レイノー氏病、血栓性血管炎

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>当帰芍薬散 (漢時代)</b> <small>(金匱要略)</small> 当帰3 川芎3 芍薬4~6 白朮4 茯苓4 沢瀉4~5	裏寒虚	湿	血	厥陰病
<b>当帰湯 (唐時代)</b> <small>(千金方)</small> 当帰4~5 黄芩1.5 桂枝2.5~3 芍薬3~4 甘草1 蜀椒1.5 乾姜 1.5 人參2.5~3 半夏4~5 厚朴 2.5~3	裏寒虚	寒	血	厥陰病
<b>二朮湯 (明時代)</b> <small>(万病回春)</small> 半夏2~4 乾生薑0.6~1 茯苓1. 5~2.5 陳皮1.5~2.5 甘草1~1.5 白朮1.5~2.5 蒼朮1.5~3 香附子1. 5~2.5 羌活1.5~2.5 威靈仙1.5~2.5 天南星1.5~2.5 黄芩1.5~2.5	裏寒(虚)	湿	痰	太陰病
<b>二陳湯 (宋時代)</b> <small>(和劑局方)</small> 半夏5~7 生薑2~3 茯苓3.5~5 陳皮3.5~4 甘草1~2	裏寒虚	湿	痰	太陰病
<b>女神散 (明治時代)</b> <small>(浅田宗伯)</small> 人參1.5~2 白朮3 甘草1~1.5 黄芩2~4 黄連1~2 当帰3~4 川芎3 桂枝2~3 香附子3~4 檳榔子2~4 木香1~2 丁香0. 5~1 大黃0.5~1 (入れぬこともある)	裏熱虚	湿	血	厥陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 辨經 (經)	臟腑弁証	治法	適應症
血分	下焦	肝	血虚湿盛	補血活血 利湿 調經止痛	月經不順、不妊症、 習慣性流産、更年期 障害、慢性腎炎、貧 血症、妊娠腎、帯下、 生理痛、腰痛
血分	下焦	肝	心氣血兩 虚 寒痛	補氣補血 散寒止痛	狭心症(狭心痛)、 胆石、腎石による腰 背部痛。肋間神經 痛
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	風寒湿痺 (着痺) 氣虚	祛風湿 除痰鎮痛	五十肩、頸肩腕症候 群、慢性關節リウマ チ、上腕神經痛
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	胃肺痰湿	燥湿化痰 理氣和中	悪心、嘔吐、悪阻、 眩暈、頭痛、二日酔、 胃アトニー、胃炎、 慢性気管支炎
血分	下焦	肝	心火旺 氣血兩虚	清心泻火 理氣活血 補氣補血	更年期障害、産前産 後の神経症。胃アト ニー者の目まい、の ぼせ、不眠症。月經 不順

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏) (熱寒) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
人參湯 (漢時代) (理中丸) (傷寒論) 人參3 白朮3 乾姜2~3 甘草3	裏寒虚	寒	氣	太陰病
人參養栄湯 (宋時代) (和劑局方) 当帰4 芍薬2~4 熟地黄4 人參3 白朮4 茯苓4 甘草1~1.5 桂枝2.5 黄耆1.5~2.5 陳皮2~2.5 遠志1.5~2 五味子1~1.5	裏寒虚	寒	血	厥陰病
排膿散 (漢時代) (金匱要略) 桔梗1~3 枳実3~5 芍薬3~5	裏熱(実)	火	痰	少陽病
排膿湯 (漢時代) (金匱要略) 桔梗1.5~5 甘草1.5~3 生姜1~3 大棗2.5~6	裏(熱)(虚)	風	痰	少陽病
排膿散合排膿湯 (漢時代) (金匱要略) 桔梗4 枳実3 芍薬3 甘草3 生姜3 大棗3	裏熱(実)	火	痰	少陽病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
營分	中焦	脾	脾胃陽虚	温中散寒 補氣健脾	胃アトニー、胃下垂症、消化不良症、慢性胃腸炎、胃十二指腸潰瘍、冷飲食による下痢症
血分	下焦	肝	氣血兩虚 心肺虚寒	氣血双補 安神、平喘 祛寒	慢性気管支炎、肺結核、貧血症、病後術後の全身衰弱、不眠症
氣分	上焦	心 心包 胆	火毒	清熱解毒 祛痰排膿	癰、疔、癤、瘰癧、扁桃腺炎、蓄膿症、齒槽膿漏、中耳炎。排膿湯で化膿を防止しようとして、できなかった時は、排膿散にきりかえる。
氣分	上焦	心 心包 胆	収	祛痰排膿	上記病名の初期で化膿防止、又は、後期で化膿しきっているのになかなか膿が出ない場合に排膿を目的とする。
氣分	上焦	心 心包 胆	火毒	清熱解毒 祛痰排膿	排膿散の作用を緩和する目的でこの合方がよく使用される。性格は排膿散に近い、病名は上記と同じ。

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏 寒熱 實虛)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>麦門冬湯 (漢時代)</b> <small>(金匱要略)</small> 麦門冬 8~10 半夏 5 人參 2 大棗 3 梗米 5~10 甘草 2	裏熱虚	燥	痰	少陰病
<b>八味地黄丸 (漢時代)</b> <small>(金匱要略)</small> 熟地黄 5~6 山藥 3 山茱萸 3 茯苓 3 沢瀉 3 牡丹皮 3 桂枝 1 加工附子 0.5~1	裏寒虚	寒	氣	少陰病
<b>半夏厚朴湯 (漢時代)</b> <small>(金匱要略)</small> 半夏 5~6 厚朴 3 茯苓 5 生姜 3~4 紫蘇葉 2	裏寒虚	湿	痰鬱	太陰病
<b>半夏泻心湯 (漢時代)</b> <small>(傷寒論)</small> 黄芩 2.5~3 黄连 1 乾姜 2~2.5 人參 2.5~3 半夏 4~5 大棗 2.5~3 甘草 2.5~3	裏(熱)虚	湿	鬱	陽明病
<b>半夏白朮天麻湯 (金時代)</b> <small>(脾胃論)</small> 半夏 3 白朮 3~6 茯苓 3 人參 1.5 陳皮 3 生姜 0.5~2 天麻 2 麦芽 1.5~2 神曲 2 黄耆 1.5 黄柏 1 沢瀉 1.5 乾姜 0.5~1	裏寒虚	風	痰	太陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
營分	下焦	腎	肺陰虚	滋陰潤肺 清熱化痰	慢性気管支炎、咽喉 頭炎(嚔声)、気管 支拡張症、肺炎、百 日咳、肺結核、糖尿 病の口渴
營分	下焦	腎	腎陽虚	温補腎陽	前立腺肥大、慢性腎 炎、高血圧症、糖尿 病、陰萎、脚氣、白 内障、難聴、腰痛、 坐骨神経痛、変形性 膝関節症
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	肺胃氣逆 梅核氣	降逆化痰 行氣開鬱	神経性胃炎、気管支 炎、気管支喘息、声 帯浮腫、嘔気、精神 不安、ヒステリー球、 動悸、不眠症
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	脾胃不和	和胃降逆 清熱止瀉	胃腸炎、胃下垂症、 消化不良、神経性胃 炎、二日酔、嘔気、 口内炎、胃潰瘍
營分	中焦	脾	痰濁上擾 脾氣虚	化痰熄風 補氣健脾	メニエール症候群、 脳動脈硬化症、自律 神経失調症。胃アト ニー者の頭痛、眩 暈、高血圧。食後の 嗜眠

方剤名と組成	八綱弁証 (表裏寒熱実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>白虎加入参湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 知母 5~6 梗米 8~10 甘草 2 石膏 15~16 人参 1.5~3	裏熱虚	火	氣	陽明病
<b>茯苓飲 (漢時代)</b> <small>金匱要略</small> 人参 3 蒼朮 4 生姜 1~3 茯苓 5 陳皮 3 枳実 1~2	裏寒虚	湿	痰	太陰病
<b>茯苓飲合半夏厚朴湯</b> <small>(日本経験方)</small> 人参 3 蒼朮 4 生姜 3~4 茯苓 5 陳皮 3 枳実 1~2 半夏 5~6 厚朴 3 紫蘇葉 2	裏寒虚	湿	痰	太陰病
<b>平胃散 (宋時代)</b> <small>和劑局方</small> 厚朴 3 白朮 4 陳皮 3 乾生姜 0.5~1 大棗 2 甘草 1	裏寒虚	湿	鬱	太陰病
<b>防己黃耆湯 (漢時代)</b> <small>金匱要略</small> 防己 4~5 黃耆 5 白朮 3.5 生姜 3 大棗 3~4 甘草 1.5~2	裏(寒)虚	湿	痰	太陰病
<b>防風通聖散 (金時代)</b> <small>宣明論</small> 大黃 1.5 芒硝 1.5 甘草 2 麻黃 1.2 石膏 2~3 生姜 1.2 白朮 2 當歸 1.2 川芎 1.2 芍藥 1.2 薄荷 1.2 連翹 1.2 荊芥 1.2 防風 1.2 黃芩 2 梔子 1.2 滑石 3~5 桔梗 2	裏熱実	風	鬱	陽明病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方劑 婦經 (經)	臟腑弁証	治 法	適 応 症
氣 分	中焦	大腸	傷暑氣虚 胃熱	清熱泻火 益氣生津 止渴	感染症による脱水、 高熱、糖尿病の口 渇、口内炎、胃炎、 日射病、熱射病、湿 疹(乾燥性)
營 分	中焦	脾	脾胃氣虚 痰飲	理氣化痰 和胃降逆 健脾益氣	胃拡張、胃アトニ ー、胃下垂、幽門狹 窄症、消化不良症、 吞酸、溜飲
營 分	中焦	脾	脾胃氣虚 痰飲	降逆化痰 健脾益氣 行氣開鬱	茯苓飲の症にして、 咽のつかえ感、精神 不安、動悸等のある もの。
氣 分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	寒湿困脾	理氣化湿 和胃	急性胃カタル、胃 アトニー、消化不 良、食欲不振、冷飲 食による胃内停水
營 分	中焦	脾	脾氣虚風 湿	補氣健脾 利水消腫 祛風止痛	肥胖症、多汗症、腎 性浮腫、腎炎、陰囊 水腫、変形性膝関節 症、関節水腫
營 分	中焦	脾	風熱壅盛 表裏俱実	疏風清熱 解表通裏	高血圧、脳出血、肥 胖症、糖尿病、腎盂 腎炎、胆囊炎、肝炎、 酒皸鼻、蓄膿症、皮 膚化膿症、常習便秘

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>補中益気湯 (金時代)</b> <small>脾胃論</small> 人參 4 白朮 4 甘草 1~1.5 乾生 姜 0.5 大棗 2 当帰 3 黄耆 3~4 陳皮 2 升麻 0.5~1 柴胡 1~2	裏寒虚	風	氣	太陰病
<b>麻黄湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 麻黄 4~5 杏仁 4~5 桂枝 3~4 甘草 1.5~2	表寒実	寒	痰	太陽病
<b>麻黄附子細辛湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 麻黄 4 附子 1 細辛 3	裏寒(虚)	寒	痰	少陰病
<b>麻杏甘石湯 (漢時代)</b> <small>傷寒論</small> 麻黄 4 杏仁 4 石膏 10 甘草 2	表熱実	火	痰	太陽病
<b>麻杏薤甘湯 (漢時代)</b> <small>金匱要略</small> 麻黄 3 杏仁 3 薤白 10 甘草 2	表(熱)実	湿	痰	太陽病

温病論 衛気營 血弁証	三焦	方剂 帰經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
營分	中焦	脾	脾胃気虚 中気下陷 気虚発熱	調補脾胃 升陽益気 甘温除熱	低血圧症、自律神経失調症、起立性失調症、常習頭痛、慢性胃腸炎、胃アトニー、慢性肝炎、痔核、脱肛、子宮脱、鼠径ヘルニア、筋無力症、産後の子宮復古不全、病後術後の衰弱、蓄膿症、胸膜炎、肺結核、陰萎。感冒後の微熱、痰、盗汗。
衛分	上焦	膀胱肺	肺寒実	辛温解表 止咳平喘	感冒、インフルエンザ、急性気管支炎、鼻閉塞、喘息の発作時、関節リウマチの初期
營分	下焦	腎	外感陽虚	助陽解表 利水	気管支炎、気管支喘息、肺炎(悪寒つよい)、腎炎、腎性浮腫、関節リウマチ、神経痛、アレルギー性鼻炎
衛分	上焦	膀胱肺	肺熱実	辛涼透泄 清肺平喘	急性気管支炎(熱感つよい)、気管支肺炎、気管支喘息の発作
衛分	上焦	膀胱	表邪風湿	祛風湿 解表	急性の神経痛(頸肩痛、腰痛、坐骨神経痛)、寝ちがひ、疣贅、汗疱

方剤名と組成	八綱弁証 表熱実虚 裏寒	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>麻子仁丸</b> (漢時代) 傷寒論 麻子仁 4~5 大黃 3.5~4 枳実 2 厚朴 2 杏仁 2~2.5 芍薬 2	裏熱(実)	燥	鬱	陽明病
<b>木防已湯</b> (漢時代) 金匱要略 防已 4 石膏 10 桂枝 3 人参 3	裏熱虚	湿	痰	陽明病
<b>薏苡仁湯</b> (明時代) 明医指掌 麻黄 4 桂枝 3 甘草 2 当帰 4 芍薬 3 蒼朮 4 薏苡仁 8~10	裏寒(実)	湿	痰	少陰病
<b>抑肝散</b> (明時代) 保嬰撮要 柴胡 2 甘草 5 白朮 4 茯苓 4 当帰 3 川芎 3 釣藤 3	裏(熱)(虚)	風	氣	少陰病
<b>抑肝散加陳皮半夏</b> (日本經驗方) 抑肝散+陳皮 3 半夏 5	裏(熱)(虚)	風	痰	少陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剤 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
氣分	中焦	大腸	腸燥秘結	潤腸通便	常習性便秘
營分	中焦	脾	肺熱痰飲 支飲	清熱益氣 利水滲湿	心不全、心臓性喘 息、肺水腫、浮腫、 胸水
營分	下焦	腎	湿痺(着痺)	通陽利水 活血鎮痛	慢性関節リウマチ、 変形性膝関節症、 膝関節水腫
營分	下焦	腎	肝陰虚 肝陽化風	滋陰平肝 熄風	神経症、精神不安、 自律神経失調症、更 年期障害、不眠症、 ヒステリー、癲癇、 高血圧症、脳血管障 害、半身不随、パー キンソン病、振戦、 眼瞼痙攣、小児夜驚 症、ひきつけ、チッ ク、夜間歯ぎしり、 小児麻痺、神経性斜 頸
營分	下焦	腎	肝陰虚 肝陽化風	滋陰平肝 熄風	抑肝散に準じる。 “抑肝散より虚証 で神経症状つよく、 悪心、嘔吐を伴う 傾向にある。”

方剂名と組成	八綱弁証 (表裏) (寒熱) (実虚)	六淫 (邪)	四傷 (傷)	傷寒論 六經弁証
<b>六君子湯 (宋時代)</b> (和剂局方) 人參 2~4 白朮 3~4 茯苓 3~4 甘草 1~1.5 半夏 3~4 陳皮 2 ~4 生姜 1~2 大棗 2	裏寒虚	湿	痰	太陰病
<b>竜胆泻肝湯 (明時代)</b> (薛氏医案) 竜胆 1~1.5 黄芩 3 梔子 1~1.5 車前子 3 沢瀉 3 木通 5 当帰 5 地黄 5 甘草 1~1.5	裏熱実	火	血	陽明病
<b>苓甘姜味辛夏仁湯 (漢時代)</b> (金匱要略) 茯苓 4 甘草 2 乾姜 2 五味子 3 細辛 2 半夏 4 杏仁 4	裏寒虚	湿	痰	少陰病
<b>苓姜朮甘湯 (漢時代)</b> (金匱要略) 茯苓 6 乾姜 3 白朮 3 甘草 2	裏寒虚	寒	痰	少陰病
<b>苓桂朮甘湯 (漢時代)</b> (金匱要略) 茯苓 6 桂枝 4 白朮 3 甘草 2	裏寒虚	湿	痰	太陰病
<b>六味丸 (宋時代)</b> (小兒藥証直訣) 地黄 5~6 山藥 3 山茱萸 3 茯苓 3 沢瀉 3 牡丹皮 3	裏熱虚	(湿)	氣	少陰病

温病論 衛氣營 血弁証	三焦	方剂 婦經 (經)	臟腑弁証	治法	適応症
營分	中焦	脾	脾胃氣虚 氣滯(食滯)	補氣健脾 理氣化痰	消化不良症、慢性胃腸炎、胃アトニー、胃潰瘍、慢性気管支炎
營分	中焦	脾	肝火旺 (肝火上炎) 肝胆湿熱	清肝泻火 清熱利湿	尿道炎、淋疾、膀胱炎、腔炎、子宮内膜炎、陰部痒痛、陰部湿疹、頑癬、高血圧症、蕁麻疹
營分	下焦	腎	寒痰伏肺	温肺化痰 平喘止咳 利水	慢性気管支炎、気管支拡張症、気管支喘息、肺氣腫、呼吸器症状をともなう慢性腎炎、浮腫、心不全、心臓性喘息
營分	下焦	腎	下焦寒湿	祛風散寒止 痛	冷え症、夜間頻尿、腰痛、坐骨神経痛
氣分	中焦	胃 小腸 三焦 大腸	脾陽虚	温化寒飲 健脾利水	胃下垂症、胃アトニー、めまい、耳鳴、動悸、自律神経失調症、乗物酔い、(偏)頭痛、メニエール症候群
營分	下焦	腎	腎陰虚	滋補腎陰 清熱(利湿)	前立腺肥大症、慢性腎炎、高血圧症、糖尿病、陰萎、難聴、腰痛、坐骨神経痛、変形性膝関節症



# 漢方医学史年表

時代	西紀	中 国	時代	西紀	日 本
前漢 (BC 202) (AD 8)		(扁鵲) 黃帝內經素問靈樞 難經			
後漢 (AD 25) (220)		神農本草經 傷寒雜病論 (張仲景) (華佗)			
三国 (220) (280)		鍼灸甲乙經 (皇甫謐) 脈經 (王叔和)			
隨 (518) (618)	610	諸病源候論 (巢元方)			
唐 (618) (907)	652 752	千金要方、千金翼方 (孫 思邈) 外台秘要 (王勣)	平安		
北宋 (960) (1127)	1026 1107 1107	銅人腧穴針灸圖經 (王惟一) 太平惠民和劑局方 (陳師文) 小兒藥証直訣 (錢乙)	808 982	大同類聚方 (安部真直) 医心方 (丹波康賴)	

時代	西紀	中 国	時代	西紀	日 本
金 (1115) (1234)	1117 1132 1144 1172	聖濟總錄 (申甫) 本事方 (許叔微) 注解傷寒論 (成無己) 宣明論方 (劉完素) 寒涼派 医学啓源 (張元素)			
南宋 (1127) (1279)	1221 1237 1247 1253	儒門事親 (張從正) 攻下派 婦人大全良方 (陳自明) 內外傷弁惑論、脾胃論 (李 東垣) 溫補派 濟生方 (嚴用和)			
元 (1279) (1368)	1337 1341 1347	世醫得効方 (危亦林) 十四經發揮 (滑伯仁) 格致余論、局方發揮 (朱丹溪) 養陰派	室町		
明 (1368) (1662)	1529 1529 1575 1578 1587 1601 1602 1615 1617 1622 1624 1642	医学六要 (張三錫) 保嬰撮要 (薛鑑) 薛氏医案十六種 (薛己) 針灸聚英 (高武) 医学入門 (李梴) 本草綱目 (李時珍) 万春回春 (龔廷賢) 針灸大成 (楊繼洲) 六科証治準繩 (王肯堂) 寿世保元 (龔廷賢) 外科正宗 (陳實功) 明医指掌 (皇甫中) 景岳全書、類經 (張介賓) 溫疫論 (吳有性)	1487 安土 桃山 江戸	1574	田代三喜明に渡る。98年 帰国 啓迪集 (曲直瀬道三) 衆方規矩 (曲直瀬道三) 薬性能毒 (曲直瀬玄朔)
清 (1662) (1912)	1682 1694	医方集解 (汪昂) 本草備要 (汪昂)		1679	医方問余 (名古屋玄医)

時代	西紀	中 国	時代	西紀	日 本
	1695	張氏医通 (張瑄玉)		1712	和漢三才圖繪 (寺島良安)
	1742	医宗金鑑 (吳謙)		1713	養生訓 (貝原益軒)
	1746	外感温熱篇 (葉天子)		1754	蔵志 (山脇東洋)
	1764	臨証指南医案 (葉天子)		1762	類聚方 (吉益東洞)
	1799	温病條辨 (吳鞠通)		1771	藥微 (吉益東洞)
	1830	医林改錯 (王清任)		1774	解体新書 (杉田玄白)
	1852	温熱経緯 (王猛英)		1792	氣血水藥微 (吉益南涯)
	1882	時病論 (雷豊)		1799	腹証奇覽 (稻葉文礼)
	1884	血証論 (唐容川)		1805	叢桂亭医事小言 (原南陽)
	1893	本草問答 (唐容川)		1818	蕉窓雜話 (和田東郭)
	1900	温熱逢源 (柳宝詒)		1822	傷寒論輯義 (多紀元簡)
	1909	医学衷中參西錄 (張錫純)		1844	傷寒論述義 (多紀元堅)
	1927	全国名医驗案類編 (何廉臣)		1878	勿誤藥室方函口訣 (淺田宗伯)

## 主要参考文献

- 中国漢方医学体系：張明澄著、耀文社  
中国漢方薬学体系：張明澄著、耀文社  
中国経絡医学体系：張明澄著、耀文社  
中国医学臨床の実際：升水達郎、張明澄著、香草社  
経絡薬学の真髓：張明澄他共著、耀文社  
傷寒論評註：張明澄著、耀文社  
明澄医話：張明澄著、医学研究社  
病氣と薬物：張明澄著 医学研究社  
中国漢方の歴史：張明澄著、久保書店  
中国医学史講義：夏三郎訳、燎原  
漢方診療ハンドブック：桑本崇秀著、創元社  
漢方診療医典：大塚、矢数、清水共著、南山堂  
蔵象学説の理論と運用：創医学会術部訳、創医学会  
中医診断学：築地多計士訳、自然社  
温病学：京都中医学研究会訳 自然社  
針灸配穴：丹沢章八監修 刊々堂出版社  
中国傷寒論解説：勝田、川島、菅沼、兵頭共訳 東洋学術出版社  
中国漢方医学概論：中医学概論邦訳委員会訳 中国漢方医学概論  
刊行会

中医处方解説：神戸中医学研究会編、医歯薬出版  
 漢薬の臨床応用：神戸中医学研究会訳、医歯薬出版  
 中医学入門：神戸中医学研究会編、医歯薬出版  
 中医学基礎：神戸中医学研究会訳、燎原  
 中国漢方医語辞典：成都中医学院、中医研究院 広州中医学院共  
 編、中国漢方  
 漢方用語大辞典：創医学会術部主編、燎原  
 東洋医学第1号～第116号：桑本崇秀編 東洋医学国際研究財団  
 傷寒論講義：醫薬衛生出版社  
 金匱要略講義：醫薬衛生出版社  
 温病条辨：人民衛生出版社  
 経絡学説の理論及其運用：醫薬衛生出版社  
 本草綱目：李時珍著、人民衛生出版社  
 中薬手冊：香港太平書局出版  
 中醫方剂学講義：醫薬衛生出版社  
 醫學衷中參西録：商務印書館  
 針灸経絡学：上海中医学院編、勁華文化版務社  
 中醫常用草藥中薬方剂手冊：醫薬衛生出版  
 医学啓源：人民衛生出版社  
 本草問答：唐宗海著、力行書局有限公司印行  
 湯头歌訣白活解：人民衛生出版社

## 著者略歴

昭和50年 大阪医科大学卒業  
 同附属病院麻酔科勤務  
 昭和52年 北里研究所附属東洋医学総合研究所勤務  
 昭和53年 大阪都島にて診療所開設  
 昭和57年 「温病学」(自然社) 京都中医学研究会員共訳

現在、大阪医療技術学園専門学校(元、大阪薬学専門学院)講師

大阪府臨床麻酔科医会理事

日本東洋医学会会員、東洋医学国際研究財団会員  
 漢方読書座談会理事

## 証と方剂学体系

定価 3,200円

1984年11月5日 初版発行

著者 玉 城 博 任  
 編集著作権者 福和産業(株)出版部  
 兼発行者  
 発行所 株式会社 燎 原  
 〒101 東京都千代田区神田神保町1-16  
 電話(03)294-3445 振替東京2-133489

ISBN4-89748-060-4 C3047 ¥3,200E